ろし、峰に笹萱を引結び、夕は松の風、朝はまかせ水の音のみ、手づから拾ひ集め、栢佛萬勤めの身狠の切賣よりは非寺里行燈の光を請けて、大方閑日を暮し兼ね、の袷帷子も、悪皺寄りて、龍門の帯も裏表に紐直し、紅の下結も、嫌所見えける、是に氣を着くる人から、本大盡にてはあらず、たる女郎、夏中同じ色なる、高宮とも、寵近く居て膳立してやろとも、それは宿への奉公、内證にて人は知らず、目に立つ物は、歌賣る女郎の跡より、風呂敷包三味線附送りを止めさせたし、日暮れて九匁五分、是程廉きものはなし、肩捻らせ髪梳かせ、消ゆれば火入の通ひ、世は下職に生れ合はすこそ悲しけれ、人たる者の男も持たぬ中に、脇塞ぐ娘もあり、遊女も太夫は、爪も人に切らせ、もするに、

髪結ふまでも二人がゝり、眉作るも人任せに、寐間の蚊帳に入るまで、引船禿にあげさせ、腰を屈める事も無く、六七人も前後を守護し奉る、圍居位の女郎は寐様に茶一つ汲みて、もてこいといはれても、身過大事と思はるゝことを可笑し、名々の身を忘れ、端女郎の分として、後の白烏又は島原懐草の形の部取廣げて、太夫の足の大きなるといふ所を、讀みもあへず笑ふ、美人兩足は、八文七分に定まれり、九文ありとて、是又三分をゆるさず、貌に四つの道具までを寸尺に合せり、只今謗る女の足は、松千代が松原踊の足元よりは、殊にさもしけれども、泥水に棒振虫あり、揚屋に紙屑籠あり、其筈と思へば見尤める事もなし、むつかしきは太夫の身なり、ある時物覺えの弱き人、わんにはなきと爭ひ、さる太夫殿へ源氏物語を借りに遣はしけるに、其まゝ湖月送られて、即座に其將も明けしに、此本を見て、さても〳〵此里の太夫も末になるかな、昔は名のある、御筆の歌書を揃へて持たぬはなし、板本つかはされて、物毎

あさまになりぬ、今時は東山の淨瑠璃會にも、嘉太夫が弟子分の者們、如何なる縁にや、稀なる御筆者の書本、大竹集にて語るぞかし、都の廣さ、碁のお對手になりまし、よといふて歩くもあり、築山を直しましよ、養子の肝入れましよ、人いらずに家のゆかみを陸にしましよ、洗はずに衣類の襟垢を落すぞ、女郎買を三日の中に粹にしましよと、自由なる事を聞く事ぞと、此口眞似を、鸚鵡の吉兵衛、花崎左吉などに語りて可笑しがらする、神樂庄左衛門黄金あらば一日にもなるべし、此前長崎の唐人様、百二十末社を集め芝居返りの揃へ駕籠、三十七挺出口にかきつけ、兩足下して、百足大盡と申して、我と粹になられたり、今も其時分に變らねども、京中に惡所銀の貸人絶えて、淋しさも自也、今でも四萬貫め欲しや、水藥師の門前に藏建てゝ、固い親にかゝり、譯のよき人には大分貸して、世の思ひ門をさせましよと申す、其夜は八月二十日、女郎は片寄せ、神樂に十露盤置かして、太夫一年勤める入賀を聞くに、月に十づゝ出て、五節句勤、太夫への遣ひ

物、萬事細に始末をして、正月より暮の年まで、二十九貫めいる事なり、しがる程には、限り知れず、承應三年春の末に、江戸より鈴八といふ男、此里に來て、名乘り懸けてのお敵、物の見事に、九月の始め頃までに、八百五十兩使ひけるとなり、右千兩京都の遊山金と書附け置きしに、返りに品川泊り夜、歩餘りしを、餘の事に使ふも勿體なしとて、人留女にくれてたちけるとなり、又材木町の傳といふ大盡、太郎右衞門方にて、御船に逢はれしが、分知りの身しらず、江戸より勘定を吟味して、面白き中程にて、勘當せられ、宿への分も、五十兩ばかり足らねども、其事は捨てゝ、優しき心根を今に申と語る中に、鉦太鼓を打鳴らし、可笑げなる人形作りて、風の神を送ると、色町子供騒ぎて、揚屋町を廻る、毎年の事ながら、女郎衆も出て見よといふ時、まだ秋ながら素紙子を着て、深編笠に竹杖便りなき風情して、宿の門口に立ちしを、手の閑がない通れといふ、此男出て行く、内義が見て、今の御客呼返せ、物貰ひにしては、如何にしても賤

しからぬはづれと、人までもなく跡を慕ひ、誰様でもあれ、遙々お出でまして、
など我に言葉を懸け給はぬは、少し御怨みも申上げたしと、手を執り宿に歸りて
笠を取れば、江戸の傳様、是は此姿はと泪を流す、傳恥を捨て面を上、此方へ來
るはよくくの物知らず、然れども馴染を便りに參るからは、せめて愛に居る中
は、下々に笑はして下されな、此度伊豫の親類方へ下りて、せめては一日暮しに
して、親仁が機嫌を直すまで、身の置所賴むなり、されども此儘人の謗りもある
べし、古帷子一つ賜はれと申す、折節此座に薫居合せて、よろしからねど是にあ
りと、お客の爲に拵え置きし紋附參らせける、軈て着更えて笑ひ出し、さてもさ
ても今日の首尾以前に變らぬ志、身に餘りて嬉しさも今は、親の跡を請取り、昔
の分を立てにばかり上りけると、懐より取出し、都に珍らしからぬ物なれども、
これは當座のと申して、百兩うちける、扨女郎は、是非に逢ふて給はれと、薫を十
日約束して、互に物仕の爪開き、諸事惡からぬ色狂ひ、外より見て、羨がる程に

しなしける、太夫も好たる男なればこそ、頭より爪懸けて切つてやる、く風俗、美しき形には寄らず、派手なる仕出し、又は名代にて思附くも嫌風なる敵。又は年寄、或は法師にても、その心を請けて勤めるは、傾城はなしと、燒付燃杭草に、書集めたる中に、是ばかりは誠を記るせる、今の薫、氣に入らぬ男を勤むる事にあらず。るまじき女也、彼男と口說して、次なる指を又切りける、或時女郎、衣裳を仕盡し、染抜きに本繪、太夫には備はらず、一重物の物數奇を、思ひ〳〵にの三五、黄紬の立縞、あれは縞を調へ、進上申せとあれば薫申せし時、末社に申し附けと、怨みとやかく、もや〳〵になりて、人の中で御申出し、我等無心申さぬ風に、手を廻しての初會、吟味もなく逢ふ此男退きて宿を變へ、大阪屋の今の野事、合點行かぬ仕懸と思へば男に心を盡し、どうともいはせぬ取持、薫を呼びに遣はし、ありし通りに間直しける、

此太夫麗しく、和に、今の世の女郎なるべし、引舟の藏之助、大分の智恵を差加へ、何に附けても惡からず、薫は尚逢はねばならぬ太夫なり、其後又指を切り、一人の男に、指を並べて三度切る事、卞和が心玉、惜きは年の明き前なり、斯様の太夫は、末に出來まじきに、二枚手形にして、二十年も勤めさせたし

捨てゝも父様の鼻筋

師走に閏のある年、先づ三十日の遊び德と、二月から嬉しがる、人の命の迫る事は知らず、今にも死ぬる身といへば、又生るゝもあり、無用の案じ置きと申す時、砂場の取揚婆、一二九十八、九九六六と、口叩きながら走り行く、誠に今年程女郎衆の、御腹の可笑げなるはなし、なんぼ夜見世で、くろめたまへとも、壁に行燈懸けた樣なる腹のなり、十四五人も見えける、昔は斯樣の事はなかりしに、女郎誠ある心からぞと、是を惡うは思はず、人の心も空になりて、難波風の暮々、

紙鳶の流りて、様々の作物、雲に懸橋の便り、方へ、色々の唐絹盡して、天人の羽衣して送りけるべし、引けば自由に靡く、女郎にあの心を持たせたし、越後町扇風方にて大寄、三十九人並べた所面白し、葺れてはそれ〳〵の床の取所、斯る揚屋の手廣き事餘所には見もせぬ事なり、居間は禿揃へて、のんやほゝ踊、中二階は遠柳が小唄、格子の間は、外記が平安城の道行語れば、おやま甚左衞門が仕出人形、そろま七郎兵衞が二王の眞似、口塞ぎて、見る人に口を明かす、其又の日は、京衆もてなしに、川一番の御座船、一の洲の蜆狩、都の山の替りとて、汐路遥に、鑓手ばかりを一舟に乗せ行く、横太らぬは一人もなし、思ひ〳〵の出立、皆太夫様の召下し、紅裏着る程可笑し、只常の布子に赤前垂、腰に鍵着けたる様よし、片肌脱懸けての酒事、是も隠居の仲居など、見るやうにもあらず、何所にやら面白き所もあり、後は酔心になつて、互に思はずも内證咄、何の口開いても、女郎を叱らぬ

はなし、鑓手の好く男は、女郎面白からず、ず、禿女郎のおもふ客は親方の爲にならき僞を吐き一つになりて、透間を見て中戸らるゝ、我身知らずと、人の聞くをも構はずして、腹痛むなぞと、傍からも、可笑き事がの二といふ男振懸つて俄に御腹が痛むとてし見えずして、次第に薄みつちやもしほらしくせ、是傾國の稀者と眺めしも、嘘を思へば恐に何れか、形に子細らしく構へて、人のかず、物もいはず、小草履取に頭打たせる、儀也、是に衆道好のましますに、療治を申し嫌な證據を見せんと、手箱より剃刀取出し、押えて元腹させける、扨も短日

外八軒屋の七賢仲間、舟遊に出で、先にて法體せし人もあり、是程に世を見限り
し人も、此道には取亂しけると笑ふて、歸路は長堀の高橋より揚れば、泣聲の賢
き捨子あり、見れば女郎の子に疑ひなし、貌を襟へ突込んでゐると申せば、さる
太夫に目附其儘、それに氣を着けて見れば、其時分逢ひし男に、鼻の似た所もあ
り、耳の生寫なる所もあり、さて佛師大勢にて、作り立てける、とてもの事に魂
の、入れてを聞きたし

反古尋ねて思の中宿

命を釣替へとは、太夫に生れつく女ぞかし、昔は其身に懸合せ、銀にて渡すさへ
稀に申せしに、近年千五百兩に請出す女郎も、十二貫目あるなし。是を九十貫目
に、高い物と思ふは、小さき眼からなり、揚詰にして算用すれば、二年半には、美しき女只になるぞかし、江戸町助左衞門抱の大和泉、

久しく病の後、喜事とて京橋の金槌といふお敵、五日續きて大寄、上野の藤を茲に移して、作花屋内匠が俄に唉かして、揚屋の臺所まで、風も厭はぬ花棚、心あ
る人手折りて簪し、見ぬ人の爲といはれしも優し、春は暮行く名殘、晝の客は返へりて、馴染の男は、夜こそ深き情もあれ、立別れ因幡が、近江節の淨瑠璃、隅町
萬字屋の庄左衞門抱の、淺妻常磐連唄、一座春の夜の夢心になりて、十八日の月も朧に霞に雨雲に、微なるを眺めしに、明方より晴て、初蝶も寢覺めて飛ぶ、春
色隣家にあるかと覗けば、蔦屋の二階から、井筒床放れの白小袖、軒端に帶を下す、子細らしく見るに、案の如く、其端に文結着ける男は、江戸町の甚左衞門忍
姿を見附け、ばつと沙汰せられて尙止めず、勤も自とすたれば、親方伊左衞門に貰ひて、戀も自由になりて、世に思殘す事も無きに、井筒嫉妬深く、後は氣の毒重れども、今更見捨難く、其年も又の年暮れて、十月十四日の夜、淺草の寺町へ詣るの由宿を出て、それより直に法體して、宗知と改め、本石町の横手に、世は

捨てゝも世渡の爲に、八百屋店を出して、
筒此男を焦れしに、出家の有樣傳へければ、我も其身にと黒髪剃落し、三
でゝ一年あまり關所を限りに尋ね、さては國遠と恨をなし、七面の明神に百日の
參詣して、邂逅せ玉はずば、忽ち火龍の形となり、御池に身を沈めんと、針百本を、
毎日指の血を搾りて、道芝を染めて祈る、其驗もなく、江戸中に住替へて、或時
白金町に身を立てし時の、鑓手の梅が我世を持ちてありける、茲に賴寄りて、昔
の好とて、十日あまりも程經りて、宵は雪明けては時雨もいたく、訪れて、物の
淋しく問ふ人も無き日とて、井筒道心をもてなしに、茶事の花餅などして、娘に
胡麻を買ひに遣しけるに、彼青物屋に行きて、調へて返る、包紙を見るに、縁に
盡きぬ印にや、井筒が書捨ての、新古今の反古也、是は不思議と彼宿に入れば、
甚左衞門姿を替へて、根白草を手して揃ゆるに取附き、此時の恨、三丁目の衝鐘
も湯となるべし、色々諫めて、又語ひの枕も次第に恐しく、魂消入る事、夜の中

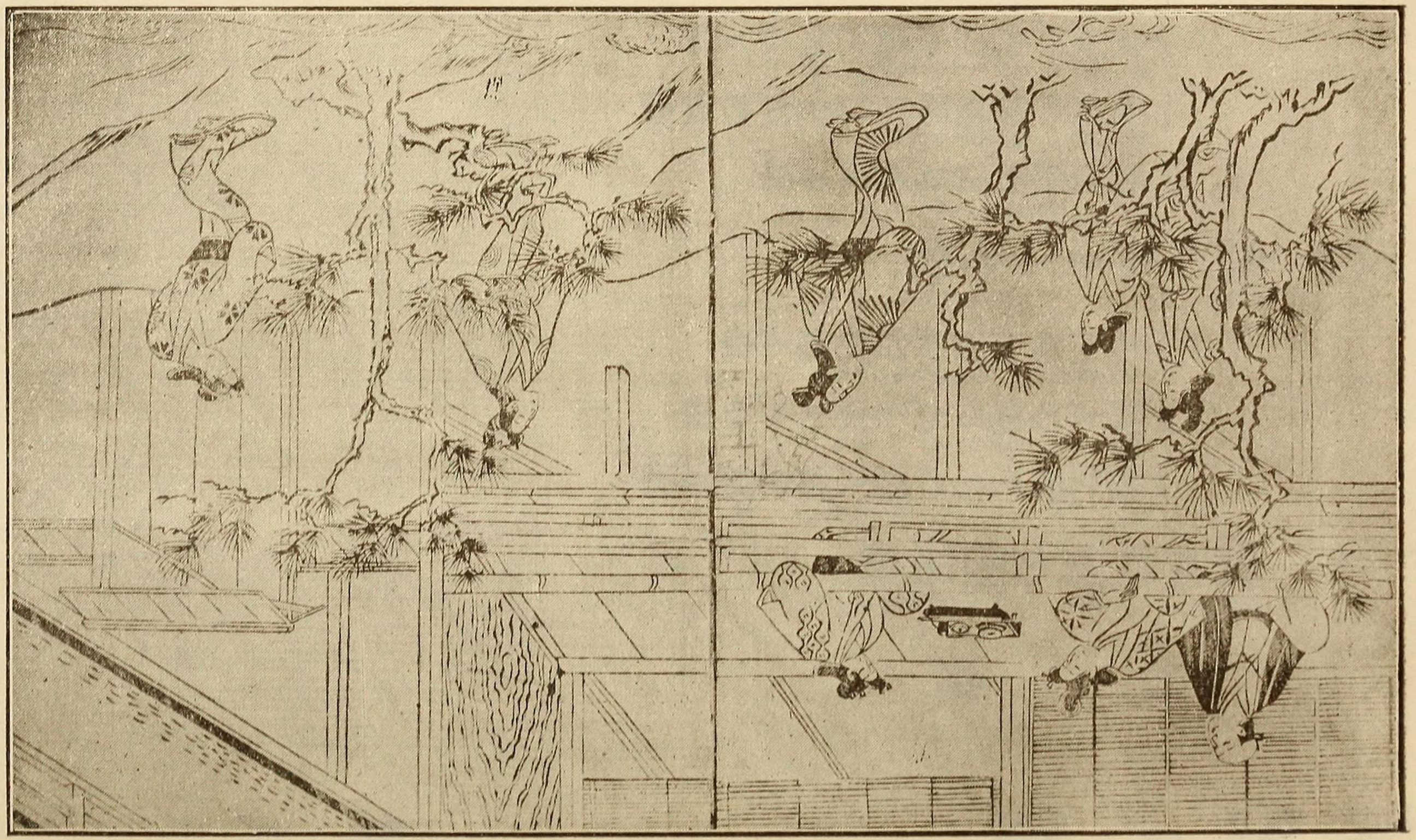
に幾度か、そも〳〵戀を、取結びし時の事を思へば、勤の男さへ妬み、片時見ぬ聲聞かぬも、焦死のやうに思ひしに、斯程まで嫌なる事、大方ならぬ因果なり、此女惡心にもあらず、形の惡きにもあらず、世間の人にも譽められ、萬事賢く、敷島の道迄も志深く、一つとして不足なきに、我を大事に思過ぎ、夏の夜もすがら夢も結ばず、枕近く居て團扇の風を絶やさず、晝は稀なる白髪を歎きて抜き、宿を出れば歸るまで門に待詫び、現にも我を見ぬ間を恨む、是は皆淺からぬ心から、かゝる事もあるかな、世上にふつと飽き初めて、貌見る事憂たてし、井筒坊主可愛がる程嫌風になり、子のある間の女房去るも、こんな事なるべし、又石町も忍出で、駿河の國安部川に、末の親類頼寄に尋ね行く、三野の昔此國より江戸に引けるとなり、其由縁ぞかし、折節は十二月九日、怪からず高砂を吹き揚げ、浮島が原も、松騒がしく、木枯の森の邊は五色の雲立重ね、名山も推量に眺めしに、海原の朝日、紅の浪を分けて、空も靜に山も仄に、煙を見附けし時、

井筒情姿にて、面は雪を爭ひ、我を見詰めし眼差、是はと心も消入り、觀念して、
少時程過ぎて見るに、其面影はなかり、
原に八本の梢の木の蔭に、柴の戸を結び、鞠子川を見下し。佛名を稱ふ頃しも、
昔日此山に、連歌師の住みましまして、
も思ひ出でしは、我も好の人より、春の朝を知らせて、
の松は峰に其儘、裏白草は谷に、若水岩根の溜を樂み、
もなく、大年の夜、初めて此庵に住みけるに、
夢にも人に逢はぬ身と思ひしに、井筒が形まざ〳〵と現はれ、物いはぬばかり、
夜ともに惱し、明れば影消えて、又夜は通ひ、二月の末まで人には語らず、思ひ
なして、後は痩せ衰へて、自限りも知るゝ時、家に木葉埋み、火宅は今と燒失せ
にける、武藏にありし井筒も、其日其刻に、眠るが如く身まかりけるとなり

人の心は花になりて、菜種咲野は、牛の角さへ常に變りて、昔日牡丹花の乘れし
事も、思ひ出れば可笑く、世を捨人の住所、
町、北山に勝りて、東に生駒葛城、二上山も
此所は大方ならず、先の近い年ふりて、今死んでも子
供の泣かぬ比丘尼の庵なり、後の世を願ふも人こそ、身の取置所爰なるべし、
過ぎまじきもの、其様佛御前も斯くやと、思ひ見れば五尺裁の大振袖、又
絶さず、殊勝に見せ過ぎて可笑し、是皆浮氣の沙汰なり、或は男に離れ
氣にて髪を截り、又親の無き娘、姨に懸るを疎み、緣附かぬ中に、浮名の立ちし
口塞げ、元徒より四五度も去られて、外聞思ひ嫌ながら剃らして、勝手
けて、悲しき事も、寒き事も知らぬ身の、極樂は爰じやと、浮世坊主の
庵さがせば思ひ草

圖一夜聞込み、それより亂れ、佛樣は人に物いはぬが難有いと、不斷の揚麩山芋、干鱈鹽鯖に變りて、忍魚賣、張籠の底より風を入れ、其中に鴨は骨折、鯉は糸作、燒卵早鮨。毎日自由を調へて、廻りけるとや、又年搆なる尼が、媒すると見えて、守袋より取出して袖に通はせ　人影を見て過去帳の咄に、變つた事共也、隱す事にはあらず、後家是等はお寺樣の物ぞかし、女郎狂は殊に赦すべし、何時ぞや島原の朝歸り に、法師の紋附の羽織、大編笠の被振、目に立つ風情ありて見るに、此邊の長老樣、是はと驚けば、丹波口の太郎兵衞、あれに限らずと笑ふ、惣じて關東に下る小僧抔、世間も赦し玉ひ、道中は精進といふ事もなし、今時の醒寺と眺め行くに、西側の生垣の中に、張紙萬葉書にして、屋彌樣於路志藥ありとは可笑く、尚南に樂人町、都に恥ぬ笙の音も靜に聞過ぎて、衣浦御所の芝、太刀造江も、敷津に續きて、名所咄も盡きぬ砂道、今宮の新家といふ一里に、日中の鉦打鳴らし、千日の念佛の聲、優く貴く、庵住は堺の色里に在し、久米之介といへる女郎、斯成變の身に、ある人の忘

て、請出されて後、折節の通ひ女となりしが、此男久米之介親を、深く恨む事あり て、歎の月日を送る、親子の因を色々詫ぴても肯ず、彼大盡心を二つに分けて申は、今日より憎からぬ暇をとらす也、世を立て今迄の如く親の貌を見まじや、又世を捨てゝ親子の語らひなす共、望に任せとあれば、久々の御好迚難有し、御方様は背かず、重ねて男といふ事思も寄らずと、世の勤なる髪、眼前に切りて、衣も豫ての用意、此男も疑晴れての泪、百々川に流れて、南北に名を觸れけると語り仕舞へば、住吉の濱に蛤採らせ、松露を探し、落葉集めて、冷酒は飲れじと、皆々どれて立騒ぐは堺の艶男、逢たこそ一景、朝夕の新町よりはと、乳守に誘はれ、勘兵衛方に行けば、門立時分にて出懸姿、大阪とは三里の違ひある物かな、爰の四天王、市橋小澤が胸の疵も、義理の首尾迚しほらしく、殘らず借て、兎角は夜共に飲明して、千秋樂は松風と云男、萬歳樂介木清と云人、大笑は三人連心の行くに任せ、又是から疊屋町へなりとも。越後町へなりとも



諸艶大鑑

目錄

一 流れは何の因果經
一世に捨てられ坊人相を見る事
一狩人の娘口から玉をうつ事
一心中死の面影目前逢ふ事

二 袂にあまる心覺
一西に磁石山見附くる事
一島原の振袖踊にはとがめぬ事
一太夫の内證小張に知るゝ事

卷八

三　終には掘抜の井筒

一八月十五夜思の晴るゝ事

一對松の跡は作髭になる事

一借りてつかへば元が利に成る事

四　有るまで美人脩行

一江戸の吉野花より盛の事

一天狗の抓む戀の山見る事

一美女は太夫の中にある事

五　大往生は女色の臺

一新町阿房宮より廣き事

一一代の惡所供養する事

一二十五の姿目前に現るゝ事

流れは何の因果經

此廣い世界に、身過を案ずる事なかれ、既に老僧隱元は、遙なる國より、棒一本で振賣に渡り、近年佛法盛の仕合、是自然の徳備はれり、されども金銀遣ふ術を知らず、一生面白い目にも逢ひ玉はず、御遷化の後は、何に成り玉ふも知つた人もなし、爰を以て夢とは申すなり、或時大津の柴屋町に、六彌といふ女郎、晝夜の別もなく、鐵砲の音を口眞似するを親方歎きて異見すれども、止む事なし、形も大方なれば、客も思ひつけども、彼口喧しきに驚き、其後は沙汰して色の勤めも止みぬ、其頃關寺の邊に、尊き木食のましまして、此法師人相を見玉ふ事、天眼通を得玉へり、此女の因果の程を思はれ、抱への女郎數多連れて、彼草庵に入りて見れば、床に日月の懸繪、著古暦を飾り置かれり、女を御目に懸けて尋ねける、少時考へ、汝前世にて、鏡山の狩人なり、生あるものゝ命を、限なく奪りぬる、

其報今身に現すと示し玉ふ、殊勝さ泪に暮れて、寔に明日の事も知らぬ身の上、
是に見え渡りたる女郎、皆それ〴〵の小歌難あり、とてもの事に後世の種に承りた
し、此女の勝れて色の黒きはと申せば、それは小野の炭燒なり、草木心なしとは
いはれず、諸の花咲く梢を切暴し、煙になしける故なり、又此女中びくなるはと
尋ねければ、元來彦山の大天狗なり口のおもはくの時、鼻の邪魔になる事を、諸
天を祈り過ぎて、今其面影なり、又胴間の短き女あり、是は河内の木綿賣の生變
りなり、二丈六尺の内を、縮めたる科なり、足手の大き女郎あり、是は法師の生
を替へて出でける、少年を叩きたて、危き蜘舞の苦みさせし故也、序に御尋ね申
すべし、同じ女郎と肩を並べ、形も違はずして、三十日ながら賣るもあるに、不
斷淋しく内にばかり居て、主の嫌なる顔色を見る、此切なさの何程かと申せば、
それは前の世にて隱居の生變りなり、明暮暮碁を打つて宿を放れず、ぞめきたがる
若い者共、手前に引附けて置きし報なり、又身揚の悲さは、吝い後家の、今此世

に身を變へて知るべし、獨り閑の夜もすがら、男の昔を思出し、寢られぬまゝの胸算用、遣ひたがる小供に、少金を盜まれぬ替りに、此淺ましき勤をするなり、一切の傾城、過去の因果を現せり、それがしは、能くも人の氣を取り、の淵をも溢し、嘘吐かぬ日もあるなれば、元正直なれども、僞は皆世を渡る業なれば、商人の諸旦那機嫌取に、心は變る事にあらず、さら〳〵憎むまじき者なり、我も今こそ此身なれ、四十五までは戀に責められ、情に沈み、思餘りて斯くこそなれ、折節秋も近附けば、亡魂をも弔ひ、見ぬ國の有樣も床し、是より山に志すと、逢阪の關の北に赴き、浦の揚燈籠も跡になし、日を重ねて、越中の立につけば、麓送火微に、松風のみ心細き谷蔭に、女の泣く聲怪からず、分て見るに、男は脇差女郎は剃刀、諸國の色人、心中死の次第を、爰に現す、我故里の見知りし、女郎ばかり眺めけるに、久代屋の紅井、紙屋の雲井、京屋の初之丞、天王寺屋の高松、和泉屋の喜內、伏見屋の久米之介、住吉屋の初世、小倉

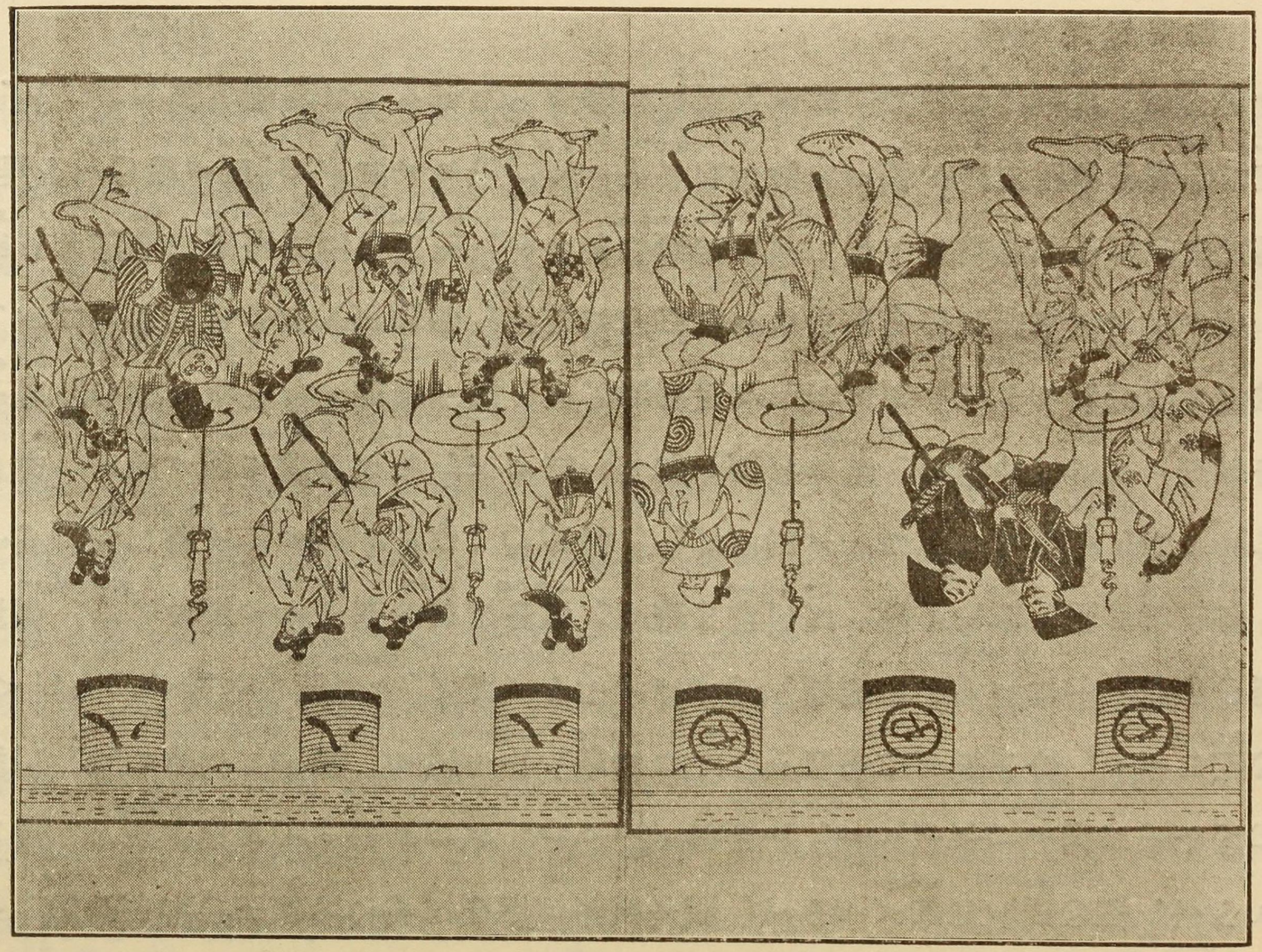
屋の右京、柏屋の佐保野、大和屋の市之丞、新屋の靱負、丹波屋の瀬川、野間屋の春彌、新町ばかりも是なれば、外は貌も見知らず、名も覺えず、扨も恐しき事かな、半時が程は血煙立ちて、千種を染めしが、夜明けて見るに影も形もなかりき、されば此思死を、よく〳〵分別するに、義理にあらず、情にあらず、皆不自由より無常に基き、是非の差詰にて、斯くはなれり、其ためしには、殘らず端女郎の仕業なり、男も名代の者は、假令戀はすがるとても爲ぬ事ぞかし、雲井は太夫職にして、淺ましき最後、今に不思議なり、兎角やす物は、錢うしないと申せし

袂にあまる心覺

京に船遊びならば、夜歩き構はぬ、銀持の親に懸り好い事過ぎて、十六夜の月滿つればと詠みし、歌の中山松が崎の送火、諸山の高燈籠、石垣町の二階騷ぎ、祇

園町の十替踊、見ぬ事は人にも咄されず、此夜の都朝鮮人にも見せたし、喇叭ちやるめら、萬の物の音までも豊に、眼病の地藏も宵からは寢られまじ、塞の河原の子供も、思ひ〳〵の作姿、松竹屋の娘も晝見るよりは、五十八ケ所の水茶屋の女も、夜目には白帷子に黒き帶ぞかし、色を好く人の此所に住まいではと、山屋の座敷に、稀者集つて、手を替へて遊山穿鑿、名々の心の行方申せば、才覺なる男懐中せし、方角見を取出し、此劍先の振る方へ御趣向と申す、定まつて北へ向ふ針の先、西に幾度も廻る事不思議也、亂酒の與左衞門が申す、是より西に當つて、都の磁石山とて、金銀を吸取る里あり、引舟が日和見るからは違なし、是へ乘出せと、野風に任せて行けば、絶えて久しき、島原の大踊、揚屋町の角に、突臼限もなく並べて、長蠟燭天に映り、軒端の提燈は、星林地に落つるが如し、爰かや四州の南、人も百餘歳經ぬべし、不老門の外にて、見物を改め、中門にて腰物を預かり、宿々の手引して店は紅の敷物、老若出家、忍姿の中には、如何なる

御方も知れず、流石王城の風俗、數千一聲も揚げず靜まる時、髮結の六兵衞が、踊が始まりと觸れる、彌七兵衞が音頭、ふる妻いとしやつさ、よいよいと、拍子を三つ定めぬ、大坂屋の女郎十八人揃帷子に、染込蘆に蟹の散し、石疊の幅廣帶、黒羽織夢といふ字の大紋、さて其次は戀の奴裝にて三十人、神主裝束十二人、其跡は猿曳十人、小鷹据えて十五人、犬は八疋、黒木賣庄左衞門は烏帽子着て、目鼻忙しき作面、地の下の人になる、天窓なしの唐人あり、裸で位牌持つも神殘らずも、髮はつゝこみ、大振袖、何れも美少人の如く、僧俗心あり、太夫天中にも目立つは八千代が振、さんごもろこしが菅笠、九一郎が投を奪はれけるすきにといふ中に、踊は崩れて思ひやる、新町の座敷踊も、所によりて又面白しと、世は夢、太郎彌七庄左衞門與平次げんかい、難波で語りし事も とて、嵐三郎四郎も尋ねて、女郎十一人打込み、むしやうといふ物に呑出して、とろつびきと介、後に油を呑むも知らず、今鳴る鐘が七ツの衝損ひ、しらけて



歸るもあり、神樂は片附けられて、便なき寢姿、げんかいは酒亂前後を知らず、願西は馴染の女郎天窓を抱えて、まだ水かと悲しがるも可笑し、扨も都のよい酒、重ねて口を利かせぬ爲に、此三人が有樣書附けて、出口の五軒茶屋に張附けて置き、そも〳〵此茶屋は、居所變るも面白の島原や、彼張紙を東寺の百姓が見て、又御法度が出たといふも可笑し、女郎は何れか、醉ふた面もせず見えける、大事に思ふからなるべし、諸事に氣を着けて見るに、晝夜に寢る間も無く、身の窶れざるは、大方なる美さとも思はれず、殊更心の持ちやうも、不斷に忙しから

ず、宵男歸れば、朝ごみ姿、只二時の樂み、其中に思を語るとも殘るべし、我等は旅の假枕、十日ばかりの流連、心もなしといふ所へ、今取出の大盡らしき二人、宿の門口より、亭主慰に行かぬか、今日晝船で下るがと、暇乞に立寄れば、でしめやかに語りし太夫とも、下座敷へ下りて、久しき事かと知殘を惜む、四五日といふ、南の堀では何人といふ、荒木與次兵衞座にあるが無用の若衆穿鑿、女

の事は吟味もせいでといふ、如何にもそれを聞きたしと申す、大阪も昔の名代ものは絶えて、君川吉田など逢初めた、此度も是にといふ、其敵様是にて、今逢ひますといへば、互に知れての問男是なるべしと申してから、兩方の咄の止む事少時あり、見ねども聞いて、少しは腹も立てどもも、何處も女郎の慣なれば、好い事爲せてうつかりと禿對手にして居る、心から心可笑し、人の勤める日、男の來ぬ中、此方のものにして遊ぶなど、長者でも嫌はなし、客を引込女郎の、道具落は是ぞかし、常は無心の返事疎し、昔日は客か大物日の頼出しも、此上に請合ふ、次第に身持は難く、衣裳の御法度ら、引女郎を頼みしに、末の世になる事かな、萬事に費用はありといへば、夜前の踊の人崩れに、さる遣手の袂から、是を遣す、それ何やら袖からと、からと申せど聞かずに、走り行く程に、取りて返つたと明けて見れば、布の一重袋に入れて太夫様入帳遣帳、擴げて見れば、八十六匁本高宮一疋、五十九匁二重蔦帯一筋、百五

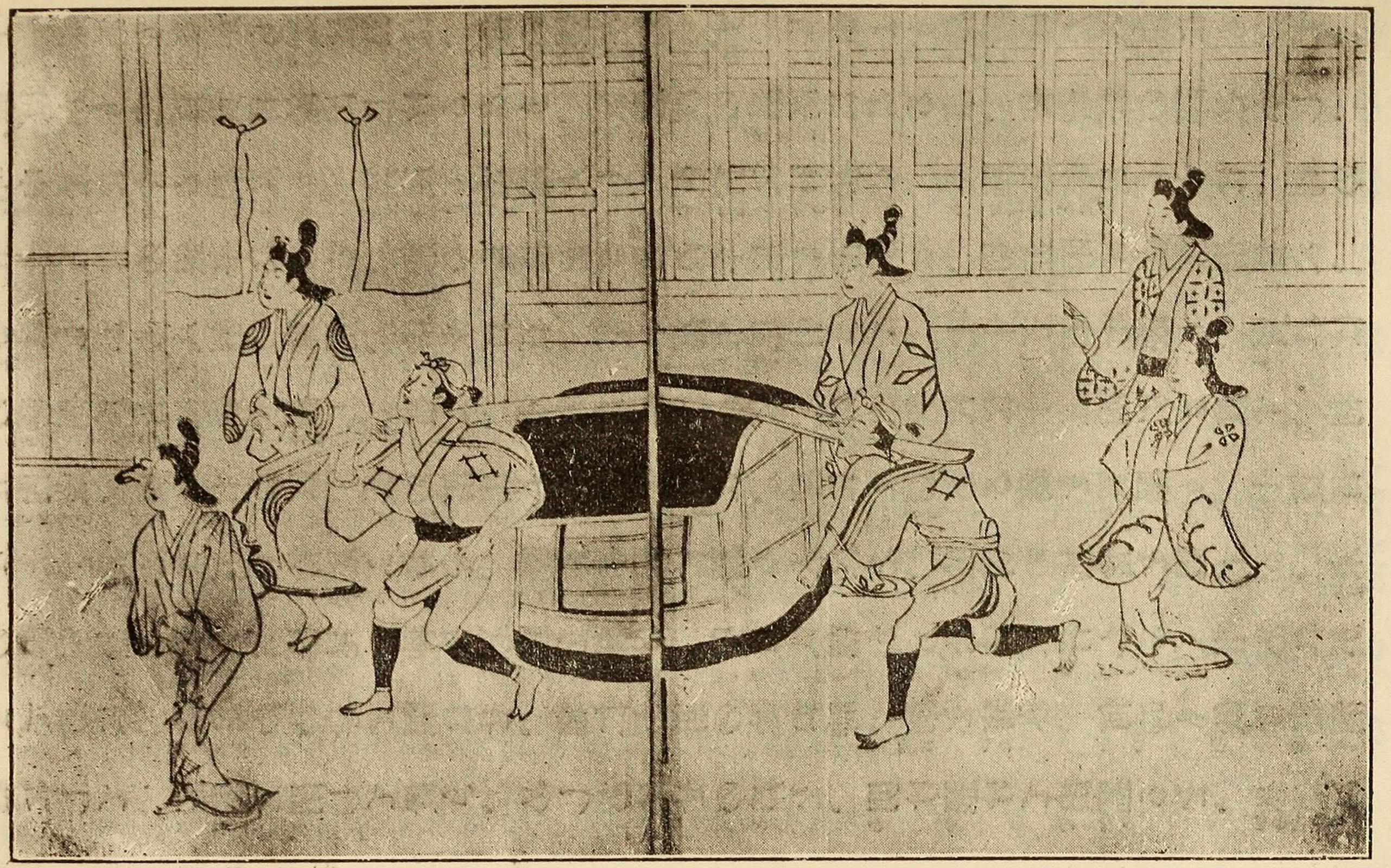
十目晒布三疋、三匁糊、八匁六分白粉二箱、三十文放鳥三羽、金子一兩御母様へ、
六十四匁奉書二束、百文玉子餅、二匁三分鯉、小判三兩守本尊様の手間、九兩二
分揚屋の取替、十八匁樽杉重、錢五百愛宕様への代參、七匁雪踏二足、小判五兩
伽羅屋へ、二匁溫飩、一文耳掻、聞く程可笑く、讀棄てゝ奥を見れば、正月より
盆前まで、合九十一兩二分三匁四分、又貰帳を見合せば、七十八兩一分なり、は
や七月までに、十四五兩も足らず、最年の中に、二十貫目の借銀あるべし、精出
しても、損の行く商事なり

終には掘抜の井筒、

此里の芋も、名に負ふ月見茶碗とて、井筒やさしき手前にて、彌十桑五嵐三まじりに、茨木屋の奥座敷にてのもてなし、別して今宵は氣の着きたる道具飾、是に附けての當座發句など書附くる、紙硯よと呼びしに、何方も揚屋のちぎれ筆を嘆

くに、の平懐中せしをさゝぐる、日頃少し手など好くからに優しく、長左衞門が唄に三味線に、更行く天を見れば、南の障子に怪しき影法師の映る、誰ぞと問へば、袖野が聲して、お月様が出さんしたといふ、それは忝ないに、よほひ〳〵うとふて、お盃さへ廻を忘れ、花の下に、と古詩に見えしは、太夫達と亂遊事なるべし、あぐりしやれたる取肴、又呑懸けてよく〳〵の事の、三番太鼓が何時鳴つたやら、お客たゝしやれませいの、聲に驚くは常大盡、四も五も構はぬ男們、鑓手も叱らず、禿も眠らず、女郎も勤と思はず、慰み替へて對番には袴を着せて門を掃かす、三番には鼻摘みて中返り、さあ始めよといふ程に、是に勝負の定め、一番負は丸裸にして墨髭作り、竹杖を衝かすなり、二取負けし男も、取負けし女郎もあり、右の掟の如くと申せば、如何にしても女郎の裸はと、尻からげに扱ひ、作髭の替りに眉墨を一方落させ、杖の替りに火吹竹を持たせ、庭を三度廻らす、可笑過る程笑ふて立歸るに、太夫殿に禿、宿の女子

に鑓手、六尺座頭末社まで、一人の大盡に大道を狹め、一丁ばかりの騒道中、女郎買の巾は茲なり、迚も及ばぬ者の目から、生變りてあの身にと羨しがるもさそと思はる、彼大盡人を見懸けては、友どちを對手に取り、太夫を自由の噂咄、脇から聞きて、さりとは、前方に思へども、誰とも知れず、忍歸りは一人もなし、侍も主の無き身ならばと思はる、町人の親方懸り、末は缺落と思定めし者に、銀乞さすこそ因果なれば、兎角嚴しき仕懸、夜歩きも吟味をすれば、自と止るものぞかし、門の戸四つぎりに締められ、朝返りの不首尾、膳据る時、旦那の顔が見やられ、此切無さ先十日計、大事に勤めと思ひしが、逢ひませいでは、命が無いなどゝの音信の文に、入日記附けさいて駈出行く、又親懸りの人は、召連の小者機嫌を取り、此師走には角をも入れさすべしと、我は鮫鞘がよいか、黒塗が好きかと、當意の嘘を吐きまぜ、今晩は諸禮を稽古して、夜が更けると内の事を申含め、設へ問はれてもいふなと持馴れし幅紗與らする抔、様々親仁恐しく、母の心



得にして、寝所を閉して置き、めしあはせの戸を、明け懸けて出懸るを、まで靜に、差足の時身を顫はせ、親仁が鼾のせぬ時、胸を痛み、何時も飲の酔が覺めて、明日は朝から公儀へ行かるゝ事なと、我心ながら物思ふ身や、嘸養子親に懸る人はと、餘所の無常を觀ずるに、堺にて切ある藥を買懸り、だ内藏を儘ならねば、銀の借出し才覺するに、利の物四貫目に賣り損して遣ふ、小判百兩借れば、口次判代に十五兩引き渡せば金はしかも八割の算用、借米百石、是も萬事係引きて、七十五石で渡し、五十石計の銀子になる、悲や身抜をさせぬ手形を書かせ、切近附けば又借銀ばかり二百貫目餘出しけるなり、色遊びの嵩高になる事、皆斯様の譯ぞかし、年中是にや手前銀ありながら遣はぬは、世の娯み知らず、先祖より持續けたる銀にも笘茂玉市兩人して色宿に行初め、足懸三年足らずに始めは微なる親共、身は絹物當てず、口には濃茶も知らず、鼻に木の香もきかせ

ず、秤目賢く、廢る塵塚までも、錢さしに拵え、年來命を繼ぎ溜め、京へも歩で上り、袂の燒飯牧方にて、天の川の水手して呑込み、枴かげたる男に、在商の道を問ひ行くに、其子は土踏まず三枚肩、前に旅筥後に紫綿入、里人に交野を尋ね、世の中に絶えてと、業平の詠まれし櫻も、今は唉かと昔を尋ね、手皷を打つて聞こえしは在恒が娘の、古き名なるべしと唄ひ、や、丹波屋の井筒は、出たといふかと小者に問へば、如何にも一昨日宵までは、の事もなき勤姿、然も茶の湯の案内までして、俄に斯くの仕合とへんがへして、西國へとも申し、又下博勞へ根引にも沙汰いたし、今日は又長堀へとも申す噂にて、確なる事は知れず、是も應長の頃の鬼が抓み申すやといふ、知らずや行をさて見せ申すべしと、上代様文取出して、此度の首尾の別れ、好とて申しの、す、しほらしき屆なり、鮫屋書物屋のある、橋筋の西へ、引取るといへば旦那、御手に入らぬが、殘憾いと申す、惣じて女郎を請出して、べん〳〵と情らしき、行ち、のこ所斗、何いぬのた

合點の行かぬ事なり、あれは彼里にてこそ、賞
慰みにもなれ、請けては常の女の、
少し擧動好い分なり、それも下屋敷の通女には格別なり、是も半分は人の物にな
れば　同じくはせぬ事なり、殊に語りし人にも相馴れ、其心は何としても残るも
のを、世間構はずお内儀様にする事よろしからねど、是又無分別外ぞかし、出る
〳〵と申す總角は、不老門の日月なり、世には長生して見ば、まだ變つた事もな
うては

有るまで美人修業

山嶮にして海荒く、ましてや美女、鄙にはあらずといへり、御の字の太夫は彦左
衛門に吉野、三浦に高尾、山本屋に利生、九兵衛に夕霧、其頃の四天王、お敵に
逢ふて弱き事なし、一手の中一日も閑といふ事なし、小船町の津田といふ男、吉
野を思染めしに、花咲く春中は思も寄らず、四月四日五日、兩日やう〳〵約束し

て、蔦屋の市左衛門方へ、晝過より出懸け、女郎を待つ甲斐もなく、如何になじみなければとて、暮より男かはりて、限のあるに、七つの鐘の鳴る時、然も道中靜に御出で遊ばし、徳兵衛が御引合せ申し、京の揚屋の如く男座敷を取持つも、馴ればかと思はず、盃さらりと廻り、短い咄、二つ三つ四つする中に、筥階子踏鳴らし、明日とばかりいふて、起つて行かるゝを、是吉野様と袖に縋り、先程待請け、せめては色らしきお言葉に、預りましてと思ふ間も、見ぬ中に覺めたる夢とも申すべし、御情に今少しと申せば、我思召しての御事、熱とは思はれず、又私の身にもなり替つて見て、道理を分けて許さんせといふ、最今日などは、御貌を見合せ申す事もなるべきとは、兼て思ひながら、斯く申置くは、明日の便にもなるべきかとぞんじ、御姿を留めて、由なや只御免と申せば、明日は御早うと、ばかり、吉野の夏山見えず、跡は淋く餘所の引語も可笑からず、兎角は還ると、揚屋町は闇、送男の長棒、土手の數番屋燈映りて螢賣の里童子、澤の蓮葉薫り、

色こそ見えね鞘とがめに、水鷄も叩いて逃る聲、忍ぶ人の爲とて、懸髭布頭巾賣など、冷水まゐれといふ、待馬立續き、今宵通ふ中に、如何なる御方も知れず、供宿遙に昔は貸乘物もありしに、近年止みて舟又早し、返りて明の日早く出懸けで忸めば、女郎も昨日の言葉末に、情を含み、機嫌克く床とらせて、枕近寄せ五七度も、逢見し樣に移る、此里古今物爲なれば、太夫より身を任せ來る時、昨日は御歸りを歎きしが、今日はひた〳〵が嫌じや、それに獨御寐れと起出る、女郎不首尾にて、是を世に沙汰する程の事にもあらず、惡しき譯さへなくば、振る事古し、男も初對面から、仕こなし貌して振らるゝなり、京も大阪も變る事なし、始めての床は彼方次第に物謂はぬがよし、內證は人の知らぬ事也、嘘でなり共、拜ふでなりとも、譯を立てぬは心懸り、我物遣ひながら、女郎狂程骨の折るゝものはなし、生附きたる風俗を、俄に作直しても、鼻缺は直らず、好き風の羽織も着たし、わつさりと物も仕替へたし、其時流ればとて、孔雀織網代升形、やうき

ひ和國などの大袖にて、女郎買とはいはれじ、三枚袷着る程になくては、奥深に
は見えず、はつとならずは此里に出ぬが增なり、思ふ儘遊興してから別の事もな
し、今まで太夫見盡せども、少しの思所はあり、若し地女に美人もあらばや、諸國
を尋出し、色町を止めんと、心の友を同行して、見ぬといふ里もなく、行かぬ山
路もなく、一年の夢に暮れて、廻れども是はと思ふ姿もなく、和國の内外の濱、
松前の島渡り、人家離れて、枯野の薄分けて行くに、入海三里の氣色、蝦夷が千
島の松しやれて、八色の玉を洗ふ、古木靑龍動かず、岩自然の美形、浪に數寄る花貝、紅雪紫蘭の眼を奪はれ、夕日
磯に落ちて、洲崎の金烏人を見知らず、斯る
風景比べては、松島磯でもあらず、古の歌人の、一目見は殘すべきに、月も可惜
影なるべしと、麓遙に上れば、冬咲く藤の覺束なく、唐房も
色を昔に埋み、落葉に交るに、人皆驚き、依草附木の生靈かと、立寄り見るに、
是より臼善光寺乃道と記せり、迚もの事に、幽しく分け上れば、藁葺の堂に佛ば

かりあつて、香花を執る坊主もなしと、眺めめぐれば、南の方の椽に、上方風なる女、袖に香など留めて、豊なる有様疑はれて又見れども人間には紛ふ所なし、御身如何なれば不思議と申す、此女泪を溢し〳〵、我古里の人の形も懐し、自らはそも〳〵都より、大阪の新町又次郎方へ、九歳の時買取られ、十一歳より禿に仕立られ、末は太夫にと謂はれしに、蕪口鼻より火事の夜、煙の映る風雲の空より、すぐれて鼻の高く羽の生へたる人に抓れ、現の心して此所に来て、其山伏の身は玩び、馴るれば此年までも日を重ね、夜店の事も忘るゝ、其時の禿の金作、我なりと語り、方々様は何の為にか、此島山までも渡らせ玉ふぞといふ、されば色に深く、日本の美女を見に修行いたせども、今日我風車に乗りて、諸國に見立てし美人の書附と、畳紙一つ渡して、何時となく消えて、杉村の木末に聲のみ、跡恐ろしくなつて此山を立退き、断涯の草なき所に座して、彼書きたる物を見れば、當

代の美姿と記して、江戸の花紫、京の金太夫、大阪の總角、其外三ケの津の太夫どもを書上せる、さては女郎よりは、美形なき事を得道して、又揚屋に入るとかや

大往生は女色の臺

爲たい事して二十年の夢、春は花秋は月、氣附は人參、女郎ぐるひは銀の浮世、本朝の色所殘らす遊廻して、今玆に難波の色町、夜店の風景、又比べて似たといふべき所もなし、松梅鹿、懷案内にても、中々知れ難し、古文眞寶なる顏色せずとも、千三百餘人の姿を見るべし、遊山ぎよつとして、阿房も賢きも出る、揚屋北に構へて、近うして西に九軒町、二川溶々として、胎堀長堀流れ入る、一歩に局、十歩に太夫、格子、大溝の漲るは、呑さし捨つる雫なり、煙の口に横るは、薫煙草の殻、太鼓の立町に驚くは、長持の還りを避くるなり、紋挑燈消ゆるが如

諸艷大鑑　卷八

く、何時まで此闇に迷ふも愚なり、親世之介より、色道の二代男と沙汰せられて
から、何の、存念も恐し、情無き口説を仕懸
け、泪湯玉に附け、秋夜に納戸飯を喰はせず、物にな
る男には逢はせず、隠す事まで語らせ、後には賣日も勤めず、宿へ内證の借錢さ
せ、戀に責忘れ哀を知らず、無理を巧み歎を拵
え、心は粹の鬼となつて、燃やして懸る胸に
入にして見るが如し、今はとて是を、信濃の山を筥
となし、切らせし黒髪四海の浮藻の如く、捨所もなくて高野の骨堂に納め、
右衞門と同じ供養をする、指も數溜りて、百八の珠に繋ぎ、是を後世の種となし、
三十三の三忌の折節弔ふ血書は千枚重ね士中に突込み、誓紙塚と名附け、田代孫
の浮かれ男に、物の限を知らしめんが爲なり、大盡大往生を極める、是世の中
に、二十より內の騒ぎは、此道に入る

皆足代と、譯知り和尚も説き玉へり、それより十年大興に入りて、太夫の難有い所を覺え、四十より内に留る事を覺らずば、揚錢の淵に沈む事眼前也、手前にある程叩き上げて、既に廻向の金の無い段に、俄に止めるも見苦し、世傳に不思議の夢の告、何處と定めず思ひ出で、願の道に、入野の薄崩出で、狹の燒原に火を懸け、一代の遣繰の文槓重ね煙の中に手を合せ、眠れるやうに臨終の時、半天五色の雲引はへ、一步小判の花降るは、日比撒置きし種ぞかし、世を先立ちし太夫ども、年月の御恩此度と、諸々の菩薩に姿を變へ、八葉の小布團に救取り玉ひ、玉琴に須賀垣を上せ、三筋に投節、黃金盃銀の燗鍋、七寶の菓子盆、青磁の名香、饗の枝、何れも身より光を發ち、彼岸に引舟の女郎までも、爰に現れ、女太鼓の藤も御機嫌取り、石車の伊右衞門が輕薄、井筒屋の太郎兵衞勝手に控へ、玉の箱階子揚れば、世界の傾國一目に、四方明の大二階、吉野が居姿、和泉が奴風俗、吾妻が閉雅面影、三夕が物越、小太夫が華奢氣質、夕霧が情貌、半太夫が美さ、

和州がばつとしたもよし、長門がもの謂はぬも位あり、大橋が自然と豊なる風情、其外太夫を瘤へて、一座に見る事、前の世でならぬ事なり、是死んでのはれず、五節句構はず、常住不斷の上首尾、頭北西面の樂床、限りを知らず右全部八冊世の慰草を何かなと尋ねて忍ぶ草扉き草皆戀草是を集め今開板者也

新選西鶴全集

貞享二甲子年

大江戸本石町拾軒店　參河屋久兵衛
大坂呉服町眞齋橋筋角　池田屋三良右衛門
書林　板　板

驕樂篇第四卷を畢へて

驕樂篇は本書第四卷を以て姑く完結とします。從來鶴翁の好色本として世に謳はれたものゝ中で、本書は餘り世に傳はらなかつたものと見え、傳本極めて稀である丈に、他の名代物に比して遜色あるはあらそはれぬ事實である。前年に物した一代男の餘談を纏めたに過ぎない雜話集である。名は二代男とあつても、一貫した趣向も主人公（世之介の如き）もないのだから、書名に『二代男』と冠したのは、前年に出た一代男の盛名を利用したもので、今も昔も替らぬ本屋のさかしらで、殊更に『好色二代男』諸艷大鑑』で澤山であると命題したもので、二代男は附たりで、本書の內容からは『諸艷大鑑』で澤山である。

それ故本書も從來の例に倣はず、後者を選んだ次第である。

從來本書の活版本となつたものゝ元祖は博文館の帝國文庫が最初で、その後に出た類本は悉く帝國文庫を底本とした爲め、誤謬脫字等其儘踏襲したものであるが、博文館本としては本書は比較的誤りが尠い方であるが、本書を校するに際し、これ迄博文館本ではどうしても文意の通じなかつた甚しい誤植、あて字、誤讀等を擧げて、本書の復飜刻の必ずしも無意義でないことを證して置きたいと思ふ。

本書頁行數　訂正　帝國文庫本誤

三九ノ八	川越瓜ハ	川越風	四〇ノ四
六二ノ四	ふらぬハ	〇〇	六七ノ六
九三ノ一一	尤の草紙は	道理（もっとも）の草紙	九四ノ三
九五ノ一一	おかたさるひもハ	おかたとおもひも	一〇〇ノ八
	彌右衞門立（だち）ハ	ねりつだち	
	紋日ハ	無心	
	百廿末社ハ	百さも末社	
	似た顏つきハ	いた顏色	

一〇九ノ五　接木に一輪ハ　椿に一輪　一〇九メ一一　自慢ハ　油斷

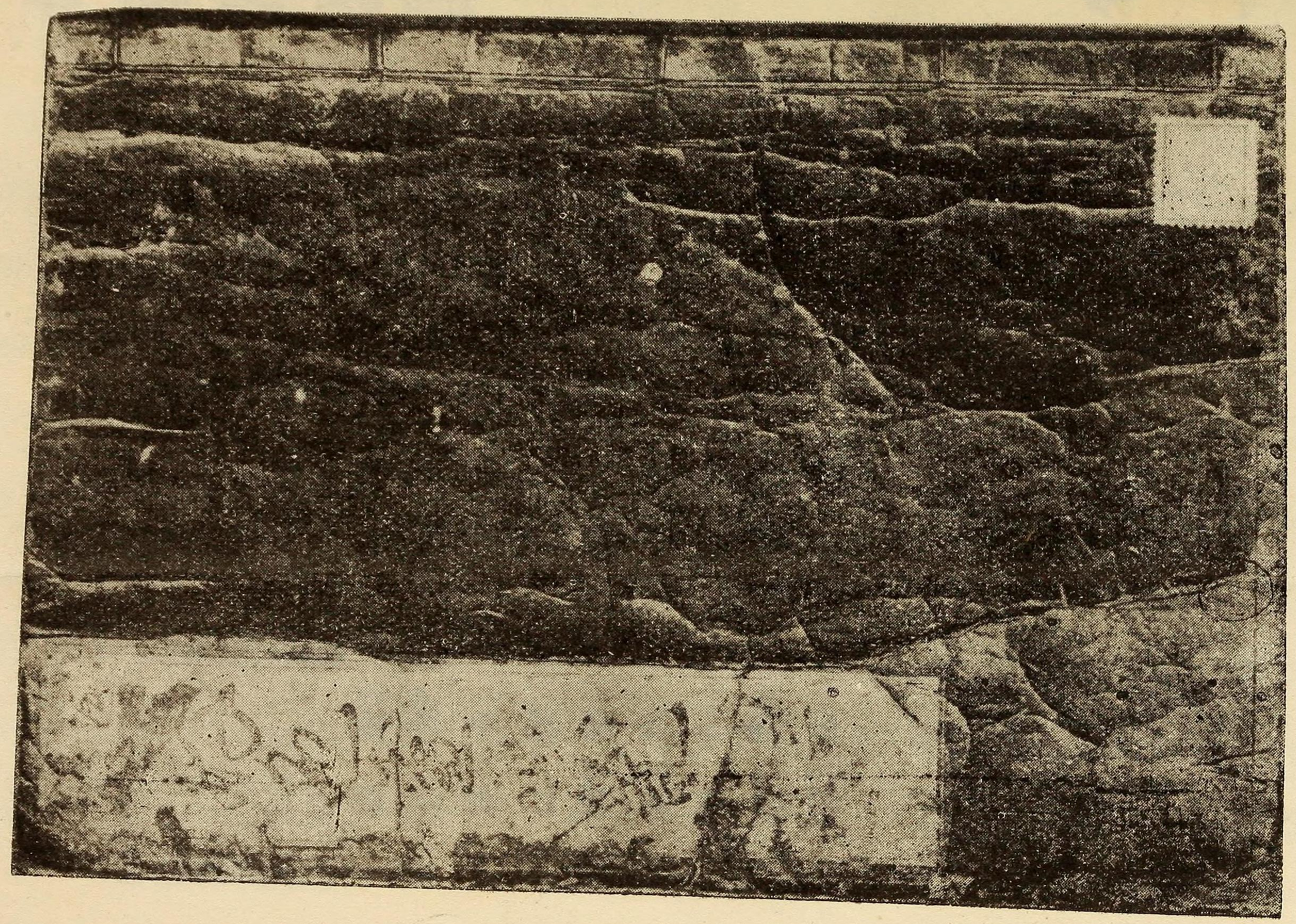
一二〇ノ一〇　縫立　原本矢張緯立(いひたて)さあれど縫立の俗字也　一六八ノ五　『人魂も咄下手以下廿二字帝國文庫本脫字』

因に云、本篇第一巻を刊行せしは今より二年以前即ち大正十一年四月の事に属す。僅々二年の間に、余が身邊にも可なりの變革もあつたが、吾が住む帝都には古今未曾有の一大變のあつたことも生々しい事實として回想するだに戰慄を覺ゆる。鶴の一大頓挫を來たしたのもそれが爲であつた。併し機運は遂にこの小さな全集全部刷分の完成を作つた。編者の身にとつて嬉くない事はない。前々巻の『一代男』上りの日(昨年九月一日)製本屋の手に移らんとするその刹那印刷所諸共震火のしたるに届せず、その後幾多の困厄と戰つて兎も角も再生せしめたなぞは、今は言ふまい。その苦悶と奮闘！今は言ふまい。

尙は一言申し添へて置きたい事は、曩に言つた本篇の第一巻(好色盛衰記外一篇)は昨年の災禍の爲に紙型焼失し、且つ殘本もなく、用紙や體裁も異なつてゐるので、あれは單獨のものと見做し、後の讀者の爲に改版し、續篇として次回に附錄として『三代男』(コレハ西鶴の作にあらざることは明瞭であるが)を出す序に一緒にしたいと思ふ。豫め御了知を願つて置く。本製を爲さる方は、騎樂篇第二巻第三巻を正編第四巻(本書)次に出る第五巻(三代男及好色盛衰記)を合して續編として纏めて頂きたいと思ひます。何れ本製の際は御通知を發します。騎樂篇を終り次第俳諧篇の續刊をも發行することを豫め申添へて置きます。

大正十三年十一月新居後十日寒燈の下にて

編者誌す



好色盛衰記

一名「西鶴榮花咄」

卷一

目錄

一　松に懸るは二葉大臣
生れつきての女郎買
丹波口の大編笠着初め
二　是は房崎の新大臣
夜見る櫻程火が降る
觀音經は遊女の名寄

三　久七生(いき)ながら俄大臣

まだもして見るは米(よね)

二百十日の戀風(こひかぜ)を

四　夢にも始末(しまつ)邯鄲(かんたん)大臣

藥代(くすりだい)はさぞよるまい

五　夜(よ)すゝはきの文反古(ふみほうご)何に

の間(ま)の貰家化物大臣

きのふ迄(まで)は尾(を)も見え

堺(さかい)はねづよい所じや

買待(まつ)がず　か　ぞ

祇園惡所の銀遣ひ、諸わけ無情の男あり、瀑座配の花代笑止、逼迫の小ばらひを顯す、これ盛んこれ衰へる二つ、女若の好色錠と名に立、東川原、西島原、二方うち外さぬ遊興、奢りの大將、上京の邊りに住所を構へ、何の家業もなく、花麗歡樂に世を暮しぬ　此先祖何萬貫目か讓りける、十四歳より今五十三迄に二千七貫七百目色遊びに遣ひぬ、これ都の遊女町始つて前代例なき大臣と、世上に言へる時花言葉も此人の事よりひろまれり、妻女は高家方より忍び緣組・年久しき契りなりしに、互ひの若盛りには仔細なくて、今老の身と成、不思議の平產、兩方男子なれば夫婦後喜の祝ひを重ね、六日だれに名づけ親を取りて千三郎と改め、乳母に抱き守の女房あまた付添ひ、日毎に成人して、既に忌明の宮參り、上御靈の氏子にて御神前に女中駕籠つゞきて、御神樂あげて颯々の聲ゆたかに、舞姫鈴

を載かせ、此若五百八十迄と口の中にて祝ひける、何れも嬉しさの三寸が上りて、此親仁機嫌のあまりに、吾先に立ち、すぐに丹波口の曙宿に連れ行き、日比目かけぶりの高さ、亭主女房にひけらかしぬ、元より軽薄所なれば、まづは御目のうち、鼻社伺候仕り、若大臣様の御越しは末々目出たし、大臣に備はりました御生れ付とそだてける、是を聞き付、もろ〳〵の末人にわつと小判、それ〳〵右のお手の動きやう、つと小判、花の都かはらず、か様の事に遭ひまする始めと、懐へ申し納めし時に、親仁の曰く、けふは替つた圖をもつて参ろ、伜千三郎大臣なり、恐らく忌明より女郎狂ひする事汝等聞き傳へし事も有や、いかな〳〵神武此かた無い事なり、これ末世の咄しのたね、二葉大臣様と早くも替名を呼び奉り、太皷の利發男が抱き参らせ、召したる浮世頭巾を取つて捨て、燒印の大編笠を着せ、此大臣に小便をしかけられたし、その着物を干所、裏の廣き家を買ふて貰ひますと勇みて、大勢

の女まじりに野道を行くに、大門の與右衞門袴肩衣にて、疱瘡遊ばさぬ守札御祝儀に差し上げゝる、五軒茶屋も暫く釜を鳴らさず、出口の茶屋は門々に打ち水、八文字屋の内儀御通ひに、親仁の逢はるゝ、太夫、唐土引舟一家の女郎三十八人、俄にさま〴〵の人形を調へ、揚屋町をさゞめき渡れば、折節花見月二十五日天神を千三郎のお敵と品定めて、引合せの盃事、一座に女郎十五人呼ばせて、召使の町女房まぜこぜに歌ひ騒ぎて、此事を奥様へ申しつかはしければ、御嬉しきとの御事にて、科負比丘尼の妙貞を遣はされ、隨分大きに噪ぎて、その太夫に千三郎を振らせぬ様に仕ふまつれと、手枕と云名香を水風呂の下焼ほど送らせ給へば、また興ありて末社共が働にて、二葉大臣様をお床へ入れますとて、かの伽羅を襁褓に留て、太夫様に頭から帯とかしまして、ゆつくり添寝をさせまし置き、宿の

口鼻が申せし、此里のならはせなれば、
夫は末社の何れもお床に呼び寄せ、二葉
にして太も〳〵の暖なる所へ足を持たせて
ば相床より襖障子を開けて、喜悦の至り
覺め時に成りてむつからせ給ふを、太夫
へども、更に泣き止み給はず、さりとは
二葉大臣様を抱き取り、この口舌は我々
て、お乳母殿に渡して懐にてつゐ済みけ
つよく御歸宅ありし、是を思ふに金銀捨
各めにも遇ふべき事なりしに、王城に住
て、仕たい事して遊べり、たとへば御車
事して遊ばふとも、内證にては人の各め
ぬ世や、

御守刀を預り置くもなほをかし、
大臣の寢姿を懐開けて見せ給ふに
扨も粋らしきやうだい、親父様へ語れ
と又座中は酒に成りける、大臣自
抱きあげて、色々お氣に入りてすか
迷惑なる所へ、なにぞと鸚鵡が參りて、
が手には及び難し、詫言頼む方があると
る、其程なく暮れて、門閉め時に
てやうのなき奢、一國一城の町人
める徳には世上の聞を憚らず、我
造りて妻女に十二單衣を着せて、

二　是は新房崎の大臣

大方の事しては面白からず、晝の月見、夜の花見、世の常を離れ、人の爲ぬ事を爲るこそ惡所宿の自由なれ、其身に何の德もなく、金銀のあるに任せて女郎はなる事に拵へ置きて、高位の淫亂にも劣らじ、唐の帝の待つ花遲きを唉かせん、必ず雷の音にて開く事あり、あまたの宮女に鉦鼓を打たせ、これさながら神鳴の如し、此響に殿庭の美花一度に色香をあらはしたるためしあり、なんぞの金ひかりで夜の花見を思ひ立ち、言ひ出すからは聞かぬ氣の男ありけり、奈良の兩の手大臣といへるあり、此古事は花月、小太夫、女郎二人まで請出して、我宿の樂寢、右に左に三つ枕をならべ、春の夜の慰み替て、古の八重櫻の名殘、千本の木末に紋付の數提燈を吊らせ、飛火の野守も出て見よ、今の全盛恐らく此鼻の高さに、二月堂の杉に棲みて、羽の生へたる人も恐れ給ふべし、本辻鳴川の色女呼寄せ、

撥音やかましく、京大阪の跡を唄へり、昔都の時は知らず、今のせばき所には氣の宏き大臣なり、不斷堺の浦より新しき鱶を取寄せ、此刺身なくては膳を据らず、其の夜着に幅廣の瀑布を織出させ、今世に流行れり、此人色道ばかり賢く、渡世の事には疎し、親より母屋作り、家藏箱入にし、七百貫目、伊駒の谷にて田地十五丁、此三つの寶を渡されけるに、家藏田地は殘りて銀子は遊女に取られ、何とも内證さし詰まり、母親の隱居銀盜み出したき智惠にて、此大臣身をやつし、母の近ふ遣はるゝ腰元の久米といふに逢ひ馴れ、腹に仔細の出來し時、珠數袋の鎰取出してくれよと賴めば、是は命勝負なれども、いとしさのまゝ身を捨つるなり、若し此鎰を盜み出したらば、身もちなる子種をおろさずに、大臣と言はるゝほどの女郎買になして給はれと約束して、相違なく盜みて、又銀も悉皆皆になし、ある程の財寶を人の物として、後には無分別に頭剃りて身の程を忘れ、世間の恥をかまはず、元興寺の恐ろしき門前に臥して、朝には女郎の名寄を觀音經に作りて、

之を讀みてたはんを申し受け、夕には竹箒をさげて一丁を錢一文づゝにて掃き廻り、夜は傾城町に行きて、昔を今に女郎の善惡言ふことうるさし、何れ此法師が會はざるは一人もなし、世の聞えをいやがりて、一文づゝ遣りて其事を言ひ止ませけるに、次第奢付て惡口言ひ止み、賃値あげして後は三文づゝ、毎晩取りければ、この所の揚錢八十五匁と、外に三文は木葉坊主が取ると大笑ひになりぬ、

三　久七生ながら俄大臣

黒衣を着すれば出家、烏帽子しらはり着れば神主、長劒差せば侍と成り、世に人程化物はなし、殊に今時の大臣といふ男、先祖の筋目また生れ付の氣高きにもあらず、それ〳〵の家業に仕合せの良き人、詩歌管絃に身をなすにもあらず、遊女のもて遊びを專らとして淫酒に亂れ、金銀を費す人を言へり、其形ちを見れば黒羽二重に三寸紋、紬の大島の長羽織、あたまつきは物のいる事にあらず、何時か

ちも是には成りぬべき風俗なり、爰に難波の北濱に、伊勢屋といへる上問屋、何れ長者に似たり、皆人の物にて外聞つゝむ丁銀、毎日宿に山なして勘定は合はずと、女郎にさへ會へばと、浮世小路久左衞門が忍び駕籠、誰に隱るゝともなく我内より乘出すを、悋氣すべき内儀のさはなくて、指櫛ぬきて鬢撫で付て遣る抔、仕立着物の仕付の糸に氣をつけてぬぎ捨て、また今宵も仕舞ひ太皷までならば、七つ時のお歸り、湯風呂を燒せ置くべし、久七お莨は持たか、提燈に替蠟燭は、我も袷一つて寒うはないかと、諸事に御心遣ひ、餘り結構過ぎてお留守に何事かあると、人には言はず疑はれける、お物好は丹波屋のお琴、にがりの走りたる太夫、客をのかせぬ仕かけの名人、頭はいつとても口舌にして、中ほどは鼻息あらき事二三度もありて、跡は男を涙もろくして、なたんと嬉しがらせ、大方の身代は分散に程なし、久七毎夜のお供に心地の良き事、見るに銀欲しく、聞くに勝間木綿のふんどしをしめて、あたまもちあげる物に異見して、汝我やうなる者の身に付

添ふ事一生の不仕合せなり、如何なる好目に掛けたりとも、これその少しもひけ
る事にはあらざるに、女郎は抓み取の中に來て、その事もなく歸るをさぞ口惜し
く思ふべし、今こそあれ我も男盛なれば、一たび出世して重ね蒲團の上にて、
榮花をさすべし、時節を待てと、小闇がりにて無常を觀じ、はや更る夜も八つの
鐘、人は床の別れを嘆くに、我は歸るを喜ぶ、己れも耳はなくて肝腎の首尾を、
ようは聞く事ぞかし、迚も叶はぬに、もは靜まれと、門口の柱へ十四五度も打ち
つけて、その後別れ、鷄をしめる如く小首をねぢまはして、膝の下に敷つけ、未
だ息して跳ね上るを帶に挾みて、前巾着より布子の質の札を取出して、是を頂か
せければ、草木心なしといへど、花代のむづかしきを合點して、いつとなく常の
物に靜まりける、定め難きは浮世、これ迄賴みし旦那は次第に衰へて、昔の見世
つき替り、錢屋と成て、絹物は帶にもせざる、亭主が手かるき鐵槌にて、烟管の
火皿を扣き伸ばして居れば、十一二なる男子が人に札貰ふて又太夫が舞の芝居

へ行くと言へば、札は只でも、草履が地から生ゆるかと白眼、母親らしき人暖簾上げて内に居ながら御城へ納まるお銀箱通るに、これ程よき見物はないと言ふ、久七立ちながら聞きて、あの心入れから此家を買ひける、それより分別して俄に始末して、昔の旦那うつけものと、夫としめやかに寝たらば、世に思ひ残す事なしと、色々思ひ入しに、一夜太其なるべき才覚なし、されども人の仕合せは知れぬ物、久七此季御奉公勤めし方は、さる仕まふたやの後家ご、大人しき繼子の後見しておはしけるが、久七お氣に入り仔細あり、つい聞けば異な事に聞へしが、いたづらにはあらず、親からの宗旨を大法華になりぬ、是故内證銀を借下され、商ふ事の幸ひあつて、米は夜のうちにあがり、夢見たやうなる分限に成て、次第に大風吹つける如く、相場物に利を得て、爰が銀子の遣ひ所と思ひ定め、久と替名して、昔のよしみある揚屋へ行けば、時々の様つけて俄大臣と言ひなして、末々が笑ふも、一歩で其口をふさ

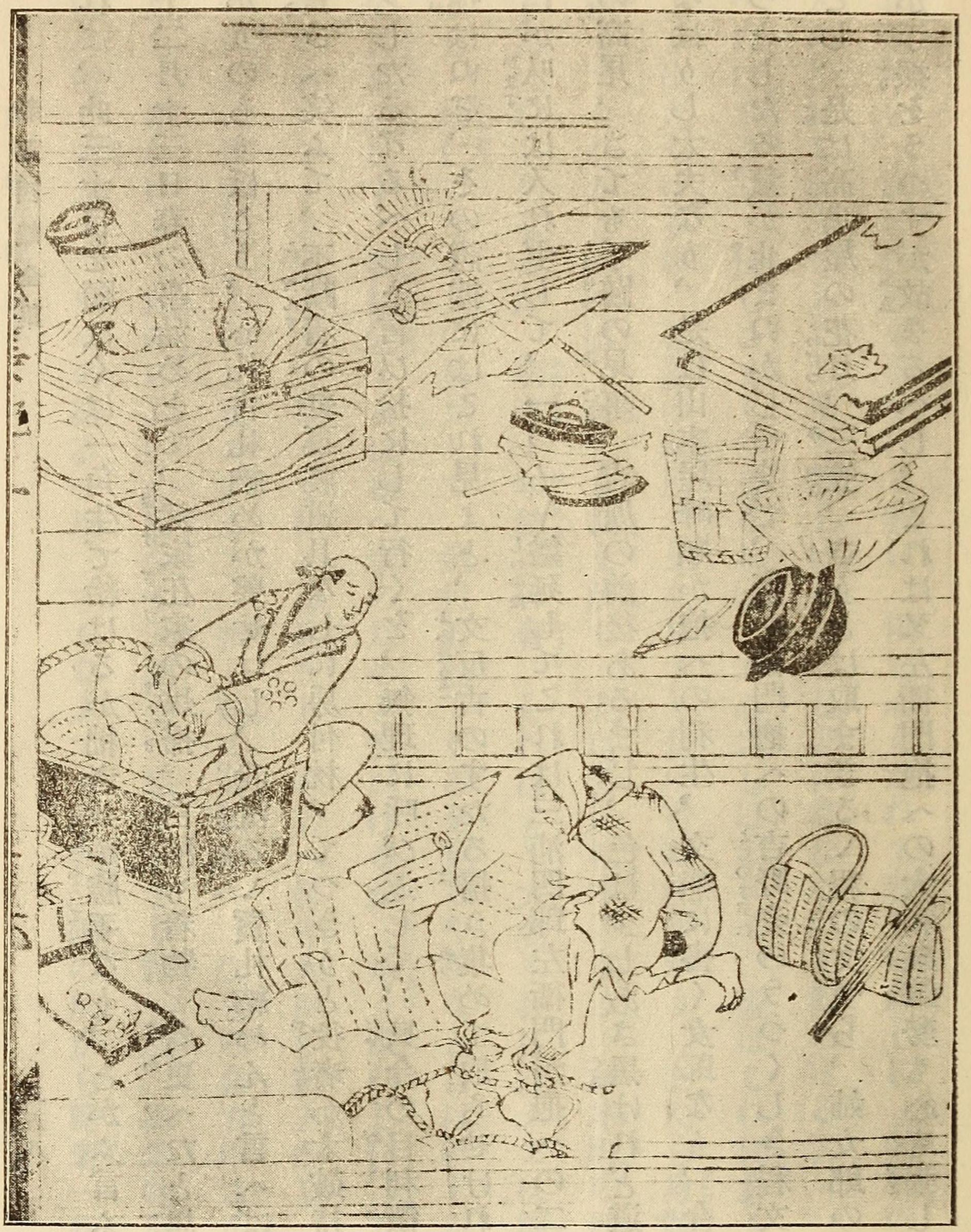
ぎ、はじめの程は名代を吟味せし太夫も、いつとなく首尾してもつてひらきて相自慢、後には久七が昔を残す、角の相敷に山といふ字の定紋を付け、其氣に入て商ひ事してとらるゝが、其親方の仕合せなり、何れ一座はをかしく、膳居る度々に頂いて喰ふなど、是はまだしもなり、知らぬ謡にすまたの手拍子、盃の間を頼めば、もとへ戻さず、禪筆の細字の掛物を、秋の田のかりほの庵のと讀むやら、さま〴〵わけもなく、片腹痛きをおし避け、同じ客ながら機嫌を取るはうたてかりき、されども二日拂に、朔日の夜の寢覺のよきことひと助かりなり、よろづ洒落たる大臣は、女郎宿屋の男子まで、氣のつきぬ事なれども、年取の伊勢參りに神ぞ〳〵迷惑する事必定也、聞きにくいことを堪忍するが身過なりと、俄大臣を仕込みしに、其程なく粹仲間に入て、落しの咄しも當座に作り、女郎の僞をいやと言はせぬ改めやう、はやらぬ女郎の長持に灸すゆる内證の事までも知りぬ、さても此里かしこくなり給ふと言へば、大方中つもりにして、未だ一年足らずに三

十二三貫目の學問と言へり、久七が太夫買ふべき事は結ぶの神も末は知らせ給はぬ事ぞかし、

四　夢にも始末かんたん大臣

榮花も己が心程にして通るものなり、さる末社男時雨して物の淋しき夜、我が宿は淺草川の浪枕、寶舟に乘たる心地して、いかひ比見たこともない善き夢に、日町筋のさる御方様に付て、忍びの内棧敷に居て、猿若勘三郎が芝居を見しに、頃はふつ〳〵と野良嫌ひなれど、藝の間に尋ね來て、べつたりと凭れかゝられ、口添へての小盃、これはなんともならず、欲しや金子貳兩、こよひ此氣より移り て、あの子をさて我物になして、惣釣に結たる髪のわけ目も、此鼻先へ觸らせ、畫の狂言にお姫さまになつたる尻つきは、爰であつたかとさすりおろして見わ と思ふうちに、此大臣は屋敷へお歸りの首尾に極まりぬ、色々止めても明日は御

番の由、これ殘念とばかりに、少し送り參らせけるに、さらばへとのお言葉の下より、御鼻紙一折お手自ら給はれり、すぐに笛吹の喜太郎が方に見れば小判五兩、是は自然と天の與へる所なり、我等其子に執心、最前より今に止む事なし、然る折ふし此仕合せ、何卒才覺して會はしてくれよ、偏に賴むと言へば、それは我等の手に入たる事、先へ御案内申して御同道仕るべしと、宿を出て行くを、是々と呼びかはして分別すれば、紬が三匹買はるゝによつて、是は先づ止めにと言ふ、平に〳〵遊ばせ、身金ではなしと勸むる、いや〳〵とせぬに極めて後、小判を横ひだの巾着に入ると思へば此夢は醒める、さりとは淺ましや、夢にさへ無用の始末をして、これ一代の損なり、思ひ切てすれば、夢の心の樂しみなる物をと、此事を人に語りて、常々さもしき我身の上恥ぢける、昔法師の女郎町では物くる〻友と書き給へり、これ程耳寄なる事はなし、惣じて女郎買一座の興に、太皷の者共迄に、格子ひとつも買ふて遣る事何とも思はれず、此銀とても拂は同じ事な



れば、此三十日を願はくは一角生で給はるが拙者共が勝手なり、とかふ十二月十三日の煤掃、白猫も着物を着更へた春の事始めとて、武家在家かりのちりほこり、お札古札納めが聲せば、乞食さへ笑ふて房付枕、てつきりと役者か太乏したるなるべしと言ひ捨にして行くを違はぬぞ、そこの證據にはこれ見よと、不斷着の紅裏寢道具なし、無理に呼び返して、只今の目己が叱には入れずして、一つ〳〵皺延してこれは三浦四郎左衞門が抱への二代目の高尾、さても手跡の見事、吉原の前後あるまじ、色は少しあさ黒けれども道中そなはりし太夫なり、是は山本屋峰順が抱への利生、今にぱつとしたる氣が止まぬかじやまで、彦左衞門抱への吉野姿のうつくしきこし、是は高島屋の花月、三笠、さりとは取まぎるゝ程の文づら、姉女郎の三舟が手振をうつすが故なるべし、これは又左衞門抱への大和泉筆勢も心も強し、殊

に座持と、廓の仔細を言ひける程に、俄に人の沙汰を聞きましての事と隠しけるを、べれば忝なし、併しさもしき身なれば、より出だしけるに、花菱の紋所、見たぞ／＼是は吉野様ゆかり、あたら心ざしは頂きて、盃はこれに散りてこれかと言へば、此乞食涙を流し、と言はれし男なるが、明暮十年餘りの奢、それは／＼大名も我に逢ふてはりし、親仁さまざまの異見して、追付五器の言葉違はず、我袖乞するは親へ孝の爲めれぬ世の中、さほどまで成らせ給ふは痛の歳暮の御祝儀、これは寶の山なり、推し束して別れける。此年の暮の心當金子三兩極め置く方から、白石の紙衣一反、すくなも小判二兩の所から野老

の中での内藏と存する方から古き蚊張を給はる、時分ならぬ物ながら、これを下さに、やう〳〵餅一重ね、これ程胸算用の違へる事なし、又幾年か五俵づゝ給はる方あり、これは違はじと思ひしれける御内證さぞ〳〵、最前乞食その暮には見えず、明て六日年越に來て、大臣の約束節季には違ふ物じやがと言へり、

五　夜の間の賣家化物大臣

河州倉橋と言へる里に、水仙の早咲、毎年後の名月には花初めて白し、都の高家方へあげての跡、民家の口切に出しぬ、花一輪を金子一歩に定つてこれを求め、茶の湯に合せて花屋より方々へ一日づゝ賃銀取つて借しぬ、いかにしても數寄者の心入にはさもしと言へば、堺の乳守にて太皷持の港、鹽の甚と言へる男、これ花車事ながら、値段の高いものなれば、賃とつて貸徳と申、然らば女郎にも借賃取り度物なり、大分の銀出して買ふて置きながら、惜氣もなく、やうは貸す事と

言へば、折節その揚屋に小天神にて口きゝし女郎、年は疾く明きて買掛の差引に身を儘ならぬ女の、何れ女郎の貸借は言ひ合せて、仲間法度に仕たきものなり、心に常々有る事を言はれし、損は何程か積り難し、鼻紙屋の書出しを見る度、女郎の身にして十年勤むる内の紙代とつて貸したいものといふ、各々呆れ果てゝ、この堺程の所に、太夫の出來ざるは、そも〳〵の姉女郎のこざかしき風儀を見習ひ、今に座崩しの女郎ありとて、大笑ひして無用の事を聞てもいふても更に腹のふくるゝにはあらず、けふは鰒汁して死なば其身の仕合せなり、迚も行先の大晦日、人が生きては置くまじと、いまだ遠いこと案じて何の役にか立つべし、濱の大臣御越、是はと金杓子持つて、甚が立舞ひければ、悲しや九日、何ともならぬ精進と仰せける、けふの佛樣どれか存ぜぬといふ、扇屋の夕霧が日と、言ひも果てず涙ぐませ給へり、大臣これは命惜み、ぬけ道なるべし、其太夫とは散々

好色盛衰記　巻一

無首尾、存じました、そんな事は言はしませぬ、日本の帥の寄合爰といふ、その無首尾忝なし、それ故跡を弔ふなり、仔細は此女郎古今の大好、備はつての上手、かりそめに四五會出合ひしに、身のすたるを覺えず面白かりし、追付命を取らるゝ時節の口説中直るもやうせし中に相果てる人とはと吟味して、我等が爲めには命のかはり、これは過ぎ行く昔、此太夫にせめて心ざしの似たりこのお女郎一代は外へ買はしませぬ、合點じやと請合て、南北の客一人も合はすなと、かため上の御祝儀、末々まで小判の花咲きぬ、中濱がかゝるからは、とてもつゞかじと、男は殘らず退きける、葛城別れての明の日届けの文遣はしければ、門の戸に賣家として札あり、（二十枚半）

好色盛衰記

一名「西鶴榮花咄」

目錄

一　見ぬ面影に入聟大臣

二　悪所が世を宇治の里に天狗頼母子

京にひとり娘有といふ事

ね預け大臣

人の命は墓なや淺草川は彼岸

揚屋の精進飯も殊勝に存する

三　都を見ずに藻脱け大臣

二　親の譲り銀五百貫目也

一　室津の遊興は鹽で淵の如く

四　難波の冬は火桶大臣

五　物遣ひながら床の不首尾は迷惑

下れば下る物也太夫より二分迄

仕合よし六藏大臣

書置なしに大分の貰ひかね

投節も小室節も聲は同じ

一　見ぬ面影に入聟大臣

母の親のならひにて、たとへば乙御前の面なる娘も、我子自慢して宇治の花園に二尺六寸の大袖つゞき、木幡は姿の山と成りて歩行よりぞ行く、都男秋萩の優しきは見もせず、唐人寺の門前に立ち止まり、當世衣裳は恥かくしと、ひとり〳〵に讃を付て、いやがる耳こすり言へるは、深い罪にも成りぬべし、折節野邊の尾花分け來る夕風につけて、これは聞き馴れざる名の木の薫り、次第に鼻驚かして見しに、樂乘物の窓の飾り、五色の玉房、青簾の中に又ひとへ絹、もみぢの障子、すかたあるとは見えで、知れぬ人樣、つき〳〵の女房さへ外より優れて隨分出立を盡しける、此若い者共、見ぬ乘物の中をこがれて、戸のあく迄と跡を慕ひ行くに、此女蔭たしなみ深く、終に面影見せず、寺社にも代參りさせて、程なく朝日山も暮になりぬ、京歸りを取り急ぎて、內八文字の蹴出し歩みも、自らにくづれて、

汐ならむ川端に蛤にぎりて、据腰ふなつきて、行き亂れての供廻り、皆々御息女に付て、跡には母親の古乘物に六尺二人淋しく、此外殘る物とて、松の横風のみ、水の水上浪かけて、長橋越えて、東詰通、圓茶屋の前に編笠深くかぶりて、小莚に座を組みて、紙衣脱ぎ捨て、身の成る果は、天狗賴母子とて、馬方柴男の小錢を貪りけふを暮しぬ、此男過し年の盆までは、祇園町を踊り廻りて、川原の左内臣と言はれて、藝子にある程參らせあげて爰に隱れて、都の辰巳角は家質に流れ、今はあの仕合と人は言ふなり、最前の京の者共も顏見知りて、哀れ昔を思ふ折節、彼母親耳近く寄りて何やら內談せしが、左內を我乘物に移し、二人一つに戸をさして、六尺共にこの事沙汰なしに、賴む〳〵と聲ひそかに前窓より手を出して、髮水入の底のやうなる黃色の物を一枚づゝ給はりける、一人さへ肩換へしが、息杖捨てゝ急ぎぬ、扨も止まぬは此道、今の母親と見えし人は、頭に黑き筋なく、向齒生ながら高野へ納め、何が浮世の面白く、男狂ひをする年かと大笑ひを千

秋樂にして立ち歸る、左內は寢もせぬ夢心地して、娘の親に連れられ行くに、
は戀の中立賣、以前は商ひ見世を取直し、奥座敷に直して、向後是の養ひ聟と、
さま〴〵の饗應、何とも分別に能はず、かく詐りて人の命を奪る難病の藥に、
を入るかと物おもふ、小夜更けて身を震はせけるに、母親左內が案內して娘が事
を末々までも賴むなり、必ず見捨て給ふな、其代りにはせめて二年も過ぎたらば、
財寶此方に渡すべしと、賴母しく懇にの給ひて、娘の寢所に入れ給へば、自らが
殿子かといふ聲常に替り、形は而も美女めきて、目も鼻もなくつゝへりとしたる
顏也、これぞ徒然草に不埒なる時代違ひの白うるりか、又は難波の大寺に住める
目なし稚子と言へる化物なるべしと、恐ろしきを欲より堪忍して燈火背きて、此
娘が氣に入て見しに、夜もすがら身添　明けても
て晝は見る事迷惑して、乘掛かつたる事とて、十日斗り勤め中に、いつとなく
心もうかれ〴〵となりぬ、二とせ過ぎて金銀請取、內のいや勤め代りに島原通ひと

思ひしが、念もない事三十日は續き難し、命こそ物種なれ、今の浮世に、よ
をさする筈ではなしと、腰元騙らして樣子を聞けば、我より先に聟は六十三人替
りけるとや、扨こそよい時、分別出したと、筆を早めて三下り半、お定まりの暇
の狀置き去りにして驅け出、あの家藏は欲しけれど。見歸り〳〵逃げたるは、よ
〳〵の事とぞ思はれて是沙汰、

二　惡所金預け大臣

工夫の水學磯なり、江戸橋の下より乘出して髮振する間に、吉原へ通ひ舟たくみ
て、二挺立を仕かけ、韋駄天の茂作といふ船頭さる大臣を乘せけるに、上下二人
は此舟の定めなるに、思ひの外あし入て、櫓は急げども遲きを不思議立つれば、
風呂敷の中に、掛硯一つ有、是にてこれほど重くかゝるべき仔細なしと。樣子を
尋ねければ、少しの物が重りにふゝるかと錠まへ開けて出し給へば、裸金にて二

千兩是に何になる小判と申、揚屋へ投銀と仰せられしに、昔は唐への投銀せしに、それは律義に明の年、糸巻物を送りぬ、是は氣遣ひなる所へ、大分の渡し金、此かはりにはおいとしや、ゆかしやなづかしやなどと、僞書まぜたる御文が送り參るべし、扨も色の惡い小判や、脈が上つて御座ると笑ひける、汝皆まで言ふな、人の心の替るが世の中、寺社に末代殘る石の鳥居を立るも、女郎狂ひの當座の樂しみも、さのみ替る事なし、何れにしても極樂へ持つては行かず、四十九日の道中は錢六文で濟む事なり、よしなき長物語に惡所の揚り場、太儀〳〵と言ひ捨てゝ、常の揚屋に入り給ひ、亭主に彼金子を預け置き、是有る限りに八千代が爲めのよきやうにと言へば、さても慥成る大臣太夫樣の御全盛、今日よりはお鼻が金龍山より高かるべし、やれ池の端の錦袋圓といふ間に死去の由申來り、是非もなき世や、嘆くに甲斐ぞなく、日頃お情にあづかり、御恩を受けたる者ども、朝精進にて西瓜の喰合せ、まだるい男は淋しがらせと、諸事面白き最中に、此大臣蕎麥切

するもやさしく見えける、女郎は此大臣の事言ひ止まずして、明暮身を捨て、其後は勤めのかたちはなくて袖を浸し、殊勝さ常の女に勝り、香花を手向て其人を弔ひける、されば揚屋へ預け置きたる金は、籠取坊が手に渡る野曇と同じ、二たび本へ歸らず、大分預り徳と沙汰して、せめても金の要らぬといふ事は有るまじ、兎角は死なれた大盡の損と、人の身の上の事を惜しみぬ、此揚屋無常を觀じ、に幸ひ歸る人あれば、言傳して遣れかし、極樂預り金我慾にする筈あらじと、大臣世にましま す時の如く、太夫をあげて、月に六日づゝ萬事改めて精進仕立にして、太皷に土手の道哲といふ世捨坊を呼びて、大臣の改名春花夕山と位牌に書き誌し、是を正座に直し置きて、其日は外の客に顔をも見合さず、世の儚なき事ばかり語りて、酢がけの牛房、柚べしなどにて酒飲み暮し、過にし會毎のつめひらき、其八無理なる言葉に、重ねて我に泣せ、あるる時は互に僞を爭ひ、勤めながら自ら恐ろしくなりぬ、後は文さへ誠にをなりて親

元を知らせ、鎌倉雪の下といふ所に、小家隠れに身をひそめ、日の薬賣て世渡りながら人の爲めとは成り、その身の目は世間もあらはに見え給はぬ事の悲し、古里に有し時、母人と連れて由井が濱の干潟に出で、藻を容るゝしやれ貝を拾ひしに、江戸より女見といふ者來りて我を見立て、是非遊女にと勸めしが、二親同心なきを、侘しき住家をうたてく、當分の難を助けたく、十二より此里へと語るに、大臣はる〴〵と雪の下に尋ね、親共に御懇なる數々、此御恩忘れも遣らず、其上歴々の女郎衆におとつれず、今御の字の太夫と言はれしは、皆是其御方の光り、思へば〳〵何事も昔と、前後を辨へず嘆くにぞ、亭主内儀御機嫌取の男迄眞の泪をこぼす事、揚屋にては珍らし、初時鳥音づれ、死出の暮山獨はさぞ淋しく越え給はんと思ひ遣られ、夏の夜の短き命、明なばまた當世奢大臣、駿河町組の大騒ぎ、富士を廣庭に移して、時ならぬ打綿の白雪、峯より伽羅の煙きらさず、我等を天人の姿に美を盡し、たはぶれらるゝも面白からず、けふの佛の事を思へば思

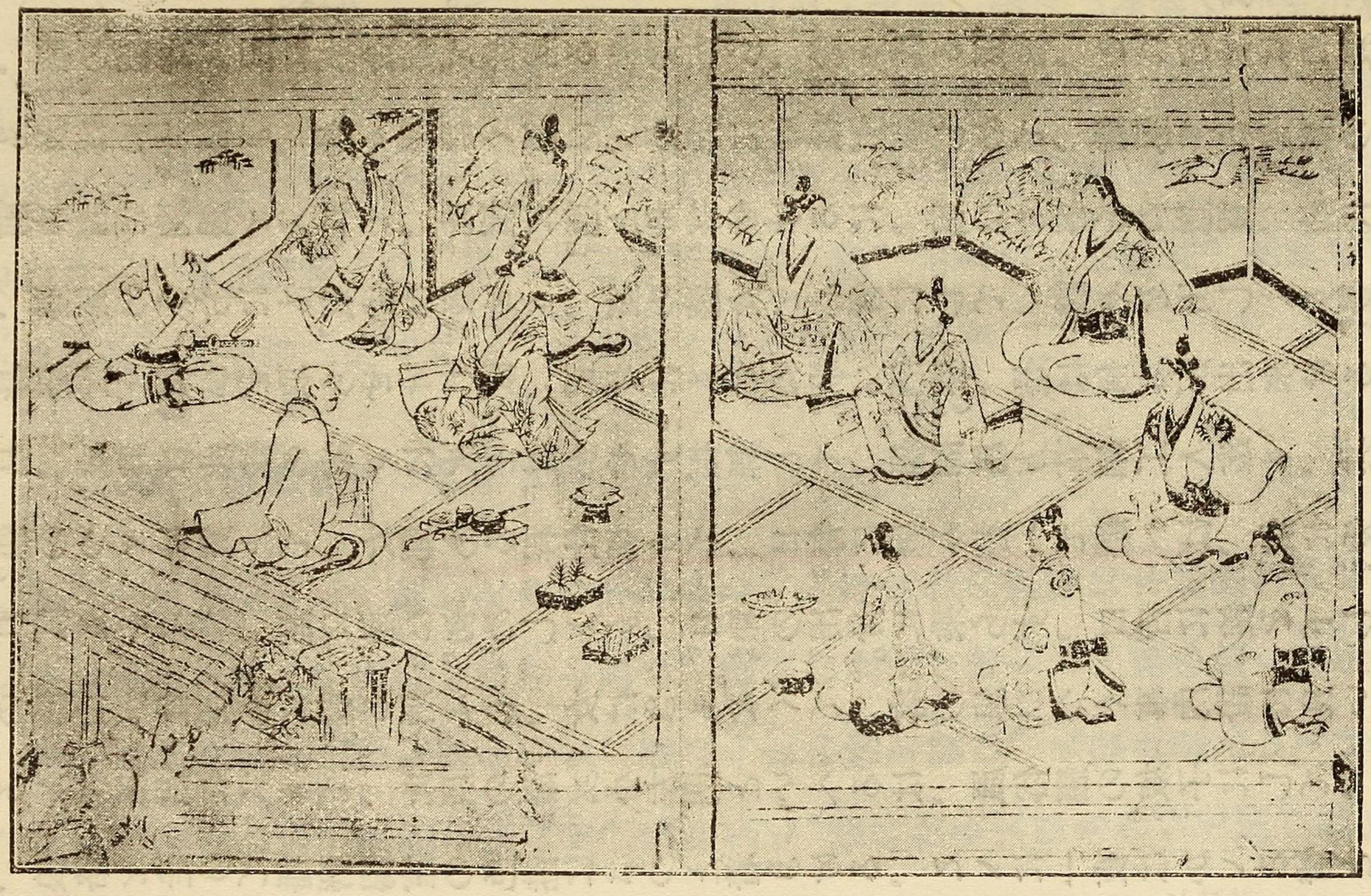
へば、流れ立つるといふ身程世に悲しきはなしと、譯もなふ取亂されしに、此思ひ晴しに、御床をとつて太夫さまを先へ寢させ、大臣様是へと、死ね死ぬるといふ御中、是じやとざつと笑ひになしける、昔の袖へ入れ參らせ、死ね死ぬるといふ御中、大臣様是へと、彼位牌を床の香、抹香の薫りに移りかはり、しみ〴〵と肌身につくれば、夢一結び覺めて、不思議や此位牌汗をかきて、生きたる如くに暫らく動き止まざりき、

三　都を見ずに藻脫け大臣

寶の島といふを何國かと思へば、長崎の事に極まれり、唐人船の大港、銀の山、白糸の瀧、流れ木の伽羅を筏に組み、麝香犬は和朝の猫より見え渡り、丁子は葉茶の煮殻の如く捨てありきて、金銀摑み取の所、一夜に長者とも成りぬべし、さるによつて淫酒の二つに世を暮しぬ、爰の下戸といふが上方の呑自慢するよりは大分強し、樂みのさま〴〵あり、此浦の隱れも無き大臣、男子三人ありしを、惣

領次男迄は所にて家業の榮花に仕付、三男未だ渡世定めず、或時一門振舞の中にて親仁申渡されしは、汝が心任せに身體をありつけん、銀五百貫目譲るべし、これを利貸にて京より見立妾女一人、其外召使、以上八人にて心易く暮しぬるか、それもむづかしくば朝夕は隠居ですまし、毎月兄ども手前より金子十兩宛請取、丸山の女郎狂ひしやろとも、又は飛子の遊山なりとも勝手次第、又壹萬兩敷金にして、肥後の熊本に歴々の人美なる娘あれば、是へ入聟になりとも、年々限米貳百五十石づゝ納まる田畠求めて、世間にかまはぬ里住ひも心易かるべし、此中何れなりとも其方が望みに任せよと申されし、良き親を持つは其身の仕合ぞかし、さりとは結構なる事を、此三男少しも喜ぶ氣色なく、せめて兄達の今迄遣ひ捨しの奢もなく、是を思ふに末子に生れたる浮世の損なり、只今の言ひ渡しの分にて悪所金程給はれば滿足なり、如何にしても五百貫目の幅にては天職も思ふまゝ成難し、まして太夫は及びもなし、たま〳〵形も大臣らし生れながら、名を殘す程

は世に住む甲斐はなかりき、兎角分別致したと座を立つて退きけるは、今時花ゆすりといふ仕掛けなるに、時代違ひの親仁驚かれて、懇なる人頼みて、願あらば聞くまじきにあらず、我等女郎狂ひせし時は、年中に百目か百四五十目にて埒を明しが、今は大分要る事を知らぬに偽りはなし、諸事こなたを頼むなり、仲が人に指さゝれぬ程女郎遊びの銀渡すべし、何か惜むべきと子に迷はれし時、長崎の太鼓持に算用道入といふもの是を承る、所に人も多きに、此奢法師を頼まるゝこそ因果なれ、人は一代男、名は末の世に残る物、金銀は涌物、此三男は私預りてこなたの御子息と、世の聞えもあれば、爰は座頭官にのぼすと思召、御太儀ながら外に御隠居金三千両御合力なさるべし。随分わたくし始末致し、三千両を二年に遣はせ、都の色里にて三男恵比須大臣と祝はせまして、追付分知りになすべしと言へば、此親仁嬉しく、然らば京の遊山を見せて給はれと、道入に金子渡し、早船にとり乗り、西風に戀をふくま



せ、浪路を走りて播磨潟室の色港にさつと着きける、こゝに一夜はかゝる情とて亂るゝ柳風呂に入りて、此所の瀑女小左門といへるは、風俗戀の奴子にして、江戸の勝山が仕出しに替る所なし、女はさもなくて、客の思ひつく事内證に良い所あればこそなれ、是に逢ひ初めしより、日和の出舟に乘らず、口舌に錠を下して室津のつゞけ買とて、女郎ある程仕切りて、日毎に慰み替へて遊べば、俄に爰の繁昌、或時は此津の家々に火を焚かせず振舞して、獵師馬方革細工人迄も、其日の身過ほど價ひを取らせければ、正月にもせぬ歌ひ酒盛、是は何事が出來けるぞと、遊興のうちにも氣遣ひ致せり、室の遊女を心當にして、國々を出しより覺悟の前巾着に駒銀を入れて、此濱に態と舟寄せけるに、思ひも寄らぬ惣買、前代聞きも及ばぬ大騷ぎ、皆々思はく違ひ、是非に叶はず揮しめて、堪忍する夕暮の恨み、曙の出舟に己れが金銀で仕居る事ながら、餘り成る狼藉、これぞ喰はぬ殺生とつぶやき、今は兵庫にも譯の女なければ、大坂まで泳ぎ着くやうに浪路を急ぎ

ける、長崎の大臣爰に浮れて日を重ね、三千兩の袋も秋の夕の物哀れになりて、都の春を見る事思ひも寄らず、櫻も吉野も金太夫も根引と思ひし金銀を、らぬ遊女にむなしく、これぞ下帶の錦、人の見ぬ事に結搆を盡し、阿呆烏の月夜に夜が明て、白けて歸る其時、此ほどの付屆するに三千兩は相渡して、今貳兩三步足らぬに、乘物蒲團一つ、春日の作の守觀音一體、三人まへの辨當、水風呂、羅沙の柄袋、大小質に取られて、又長崎へ歸るは無分別者、

四　難波の冬は火桶大臣

名を更へ、品を替へて、勤め女の行末をかし、一年大坂の新町に木村屋といへるより御太夫を仕出し、其名を越中と改め、難波に五三は珍らし、都の如く引舟付て、堀江の水揚より一日も隙なくて、蘆の一夜の情を競ひ、久敷此里めいりける が、人は移氣にして、又色も狂へば、若やぎて、後れたる大臣もとつて出づれば、

丈夫天職十五まても自らはやり出、女郎一入作りなし、親方より流行衣裳の仕出し、素足に雪踏の音高く、禿も鼻紙目に立つほど入れて、内のよろしきにや、あがり膳に氣を移さす、遣手も布子の色あげして、前垂も常に替りたるやうに見え、當座のくがひつとまり、無上に幅をやける、萬の商人後先知らずに掛賣すれば、一切の女郎に位のつくは、何時からにても客りて、中卑なる貌も鼻高ふ見えぬ、一切も通り次第なり、慳成る男あれば、自から張強く、一座もでくる物ぞかし、中にも筋に風俗外に異り、心餘り、我ぞ太夫と思ふ顔つき、諸人これを惡みしに、形見よげなれば素人好して、一つ二つ逢ふて見る客重なりて、賑やかに成るに隨ひて、俄に勿體つけて淋しき時を忘れ、内證の御無心に手を合せて詫言したる男を、今は見ぬ顔するもむごき心入ぞかし、よくく世の事を案ずるに、金銀持ちあまりて自由する大臣は、大方にもつて參つて、折節も振る事、女郎に張あつて聞きよし、色の道なればこそ三月延の借米、なしくづしの借錢、買置して賣損の銀廻し、

又は家質、或は連判銀、是等は命にも代る程の才覚なり、此悲しき銀遣ふ男を、いかに根の事のやうに思ひて、一時が拾五両七分五厘づゝにあたるなり、三番太鼓まで遊びてから、これにあしらひ、首尾する一夜を一世一代の積りの有る事なり、四座の桟敷を金一枚、是は大勢の仲間借もなる物なり、これ程高い物はなしと算用して見て、無常観ずる男、宵よりいふこと微塵偽りなく、お情に預るなど又もない御縁と。こは〳〵御身に近寄り、耳の邊りへ口を寄すれば、酒嗅いとて面を背く、男律義に息づかひを止めて、お手が外へ出ましたと痛はれば、これ程の事は覚えが御座るといふ、男取つく島もなく、なし千鳥の浪枕、寝覚異なものになつて、捨て起るも惜く。又小語て白銀の茶碗が一つ有るが、こなたには要りませぬかといへば、今こゝにあらば貰ひなしましよといふ、宿にあれば當座の御用には立ち難し、必ず明日は持たせてと、言ひさま、前へ廻れば又後ろ向に成りぬ、夜も更て帯もとかずに起き別れぬ、此

行方の男には、田塞ぎて首尾してやるが道なるに、幾度か客にうたてがらせしが、人同じ顔にあらず、此太夫淋しき秋の頃より名月と呼び替へて、天神もむかしの老松の時雨、濡も次第に聞かず、色にあまれる紅葉と名を替へ、鹿の位に下り、程なくほのかといはれて、壹匁取の端局に出しが、今に太夫の面影ありとて。大臣も物好に遊びにあがりしが、萬人好かねば二匁に下して、越後町にて三笠と言ひし事久し、年も二十四か五になる迄振袖せられ、悲しき勤めやめがたく。若い顔つきをするを、あれは太夫時さへ丸袖なりしかと、見知れる人の笑ひぬ、それより初川とやさしき名をつぎて、壹匁取になりて、阿波座の東町に見えしが、此時は人も忘れて、言ひ出しぬる正月もなし、その後は分にして五分藏に威り、よし原町の中程に腰張なしの局住ひ、昔の花色繻子に變りて、河内木綿の鶯茶に、將棊の駒の染込、是も品やりて、勝間の内衣も薄よごれて、貳分づゝまで、太夫より一生のうちに下りぬ、流れの身の行末必ず知れぬ物ながら、是程まで衰へた

好色盛衰記　巻二

るは例少なし、太夫の時床にてつらくあたられし大臣、惡さに訪ねて八文の火桶、消炭貳升合力せしを笑はれもせず、

五　仕合よし六藏大臣

仕合よし六藏大臣、都の一富士に雪の面白き曙、大津の今六藏といへる馬方、己が一つれに別れ、それらは伏見へ、我は京道、錦の棚へ干鮭を送り荷、是も昔は夢見たやうな仕合、都の一富士に雪の面白き曙、大津の今六藏といへる馬方、己が一つれに別れ、それらは伏見へ、我は京道、錦の棚へ干鮭を送り荷、是も昔は生きて働く事もありなんと、異な物に無常を觀じ行くに、栗田口の山蔭になりしに、まだ明六つの鐘前にて、物の色はたしかならねど、京の人の聲して其馬八丁まで賴むぞと聞くに、一足も引かれぬと嘆くを聞くに、哀れや、いかにも遣りましよと、荷物を街道に下し置くに仔細なく、其儘有つる事、今君が代の直なる道のしるし、丸の内に松といふ字の嵐も烈しく、北時雨も痛く降りて、鞍の上まで冷えわたれば、此乘手おちこちの立つ事も成難く、世の限りなる聲して、汝に言ひ置く

事のあれば、近くへ寄れと言ふ、氣の毒成る人を無用の情にて乘せけると、後悔跡へも先へも行難し、さりとは弱き御事、今少し行けば追分なり、養生成るべき事なれば、是口を開き給へと、岩根のさゞれ水を手に掬ひて參らせしに、此男息をつぎ、我は親に勘當せられて武州に下る心ざし、空しく爰にて相果るに極まりぬ、京の所を言ふ迄もなし、死骸をも隱し、跡も弔ひて、我に成佛させよ、此肌着に小判千兩縫付しを其方に取らすなり、此金外の事になさずとも、柴屋町の女郎狂ひして、我跡を弔ひ給れと、是を最期にして僞なし、是非もなき世とて、遺骸を闕寺の邊に置けば、京の追手の者これを嘆きて、はや乘物にて連れ歸りぬ、四五日も樣子を聞き合すに、何の取沙汰もなければ、七日に當る日より俄大臣と成つて、物の見事に遣ひ出し、年月執心の女郎片端より揚て晝夜の奢、初めの程は銀の出所を不思議立てしが、何時となく言ひ止みて、物の見事にしこなし、逆鬢の頭つきも當世風にかはり、天目酒も忘れて、盃の遣繰も覺え、投節も小室節

に替へさせ、後は諸分を辨へ、此男に出逢ふて續く大臣なかりき、次第に取出て、兵作といへる女郎に指を剪らせ、大津にならびなき帥と言はれて、馬を追ひたる時の形はなくて、天晴六藏大臣、風俗も仕出し、女郎の善惡もよくあらためて、『胸の燒付』といへる書物は、柴屋町の白鳥なり、此所にかるはづみなる咄しの有るも、人皆聞き傳へて、六藏大臣の口なるべしと沙汰する程になりぬ、これを思ふに、銀さへあれば何時成とも賢く、花奢に分知りとなつて、女郎町の榮花殊更何事もならぬといふ事なし、今言ふも古けれども、極まる所は銀の世の中、

（原本廿枚半）

好色盛衰記

一名「西鶴榮花咄」

目錄

一　難波の梅や澁大臣
　雨夜の對物語新町の事
　末社智惠なき神の事
二　無分別の三大臣
　吉原を中年よつての事
　初なじみを俄後家にする事

三　反古と成る文宿大臣
二　寢覺の大皷身をちらす
一　西行櫻の町の番太が事
四　腹からの帥大臣
二　さる女郎のをとし子
一　風俗は肥後そだちの事
五　戀風しのぐ紙衣大臣
駿河町はづれに遊び寺
名譽靈寶拜まする事

世は次第送りなり、隨分愚なる親より其子は又鈍なり、此如く色女も末にはなぬ、大臣も今のやうにはなくて、人の迷惑する程の僞つかぬ世の時、春の夜の雨に降り込められて、太鼓のなにがしが宿に、仔細者四五人集りて、品定も事古し、女郎と對の物を寄せんと書付しに、きよろつく物夕霧が眼、今日の猿若、よう喰物小琴が食、川口の沙魚釣、塗る物寺入のいろは、和州が白粉、黒赤物檳榔子染、小太夫が首筋、ひよつと出た物心齋橋の皮癬の看板、背山が尻つき、なづまぬ物鬼の勞瘵、主殿が三味線、しるき物釜底の食、瀧川、人の知らぬ物釋迦の私銀、小倉屋遠州、結構で荒た物豐國、霧山が頬さき、ひんと反つた物取て置の雪踏、よし岡が向歯、香を嫌ふ物まんしうが口中、長町の西がは、大事にかくる物新九郎が一挺、大橋が道中、せはしき物付送りの銀、大隅が目鼻の間、あとさきかま

はぬ物、闇の夜になりぞこなひの瓢箪、高間が心、廣ふて乗心のよき物、かり切の舟、定家が何やら、してもせいでもの物、弟の精進、井筒が茶の湯。跡がさき、尺に足らいでも用に立つ物、米の相場、揚巻が目つつても買徳なる物、金太夫、黒うても堪忍して見る物翁の面。朝妻が鼻の穴、目のきつわたりの錦、金太夫、黒うても堪忍して見る物翁の面。朝妻が鼻の穴、目のきつとした物、よし田が座付、孔子の杉燒、首かくす物腹切の小芝居、早川が郡内縞、ふるき物天王寺の楠の木、雲川、切賣にする物霜さきの狼、つまきが黒髪、明てわるき物八月十五夜、長谷川が口、ぬるいなふ細長い物、こざつまが立姿、新川の堤、別の事もの菓子、定家、其日に替る物、冬の半天、土佐が心ねの夜の時鳥、初花が床、泣て人をおどす物、千日寺のうぶ女、有馬が仕掛、かはらしう淋しき物、枯野の萩、かづらきが出前、松から下る物、洞岸寺の藤、山の井、一座見るばかりのよい物、淨瑠璃芝居の配り札、主水が酒ぶり、行末待物、實植ゑ

の柿の木、藤山、物言はぬ物、長柄の人柱、萩野、いやなかたへつる物、昼の紙張、よし川、跡をふる物、尾の輕きいかのぼり、金吾、此外時めく女郎あまたなれば、つど〳〵にいふに足らず、其折ふしは太夫と、形の花にあらはれけるに、今時の太夫は幅のある天職には見劣りぬ、十五はまた局女郎よりは風儀惡しく成りぬ、天神は又むかしの鹿戀女郎たき物は此里の諸分なり、しかし女郎は以前より淺ましく、さりとては昔にて、僞も男のすける様に言ひて、慰になる事今ぞかし、されども勤め日の外、物まへの無心、我も人もいそがはしき中へ、迷惑ながら商賣のさし引は捨置、色町の付届、身の一大事と覺えぬ、これひとりに限らず、此道に足を踏込て深入をする人並ぞかし、人の事は言へど、よい加減とてやめるはならねば嘘の分散、殘る物とてわけある文、ふすま一枚、敷物外になくて、春の夜の闇と替名呼ばれて、鬼にもまけぬ心根の大臣、柊木兵四郎を連れて、一盛は花之丞にたより、木蔭を